東海道名所圖會 五

ル 3
376
5

門 ル召3
神 876
巻 5

東海道名所圖會卷之五

目錄

富士山
竹取物語 朝鮮人詩稿 源頼朝卿時牧狩圖 源頼朝卿富士の圖 紀行 南陽文集 焦氏筆乘 吉原
富士沼 都良香富士記 義楚六帖 羅山丙辰紀行 十六夜日記 神社考 万葉古詠 史記 祖徠文集 曙の記 富士賦 左不二 芝瀬川 白隠語錄
富士鳴澤
元吉原 鎧石
要石
原
師歯迫山
井出館奮趾
足柄関
富士人穴
沼津
田子浦
手児呼阪
白隠禪師蹟 松蔭寺 白隠行狀畧記
興國寺古城
阿野禪師古跡 阿野細江 愛鷹山
横走関
新羅三郎秘曲傳授
八重山
車返
足柄神祠
竹下道
丸子神祠
千本松原 六代御墓
富士隠
亀鶴墳

黄瀬川
千貫樋
別宮八社神
池
馬場
祭園
興小島
風越臺
○箱根
本社
薬師堂
箱根温泉
曽我兄弟墳
鹿墳
庚申塚
底倉湯
湯本湯
早雲寺
豊太閤陣所
酒匂川
藤巻寺
日蔭馬場
鳴立庵
鳴立碑
三社権現
馬入川
東本願寺
動座
二王門
真筆石尊社
小餘綾礒
鹿松
小餘綾社
西行上人像
什物
詠草
花水橋
○十間阪
大山寺
神輿舎
良弁杉
鐘楼
経塚
○平塚
大礒
曽我里
吾妻山
切通地蔵
川勾神社
相模國府
鳴立澤
虎子石
八幡宮
前不動
行者堂
山門
大雄宝殿
宗祇終焉地
駿豆両國堺
○三嶋
鳥居
二天門
三層塔
寶蔵
神供所
古々井杜
豆相両國堺
箱根権現社
塔澤湯
勝麗山
玉緒橋
浄泰寺
小田原北條
舞臺
鳥部屋
随身門
神馬厩
走湯山
富士見平
○箱根
未社
親鸞聖人堂
生死池
元西河原
大師堂
曽我兄弟
頼朝狀書石
多田満仲塔
蘆之湯
宮下湯
温泉記
佛殿
宗祇墳
北条氏墳
石橋山
○三嶋
鳥居
薬師堂
熱海温泉
山中古城
箱根湖水
名産
獅子巌
御供所
名所四十九箇所
藏
十二光佛石像
氣賀湯
堂嶋湯
湯本名品挽物店圖
早川
小田原
外郎店

吉原驛よりうつくしき
西の方に山見ゆる
うすもゝいろに裾野ながく
すそのゝはてに
異國ふうのやねひくく
ならびたるさま
いとめづらかなり

富士山
扶桑第一山
重此對屏顏
白雪初陽映
峻嶺霄漢間

蕉中常

たゞひとり
ゆくぞこの旅

洛 伴蒿蹊

竹取翁
赫奕姫

源順が竹取翁の
實檀園紀ふ地しく
書れしと安仲ぬしの
宣ひろう竹元の翁が
娘の美顔若瓜乃
繁人の如れや浅宮ふ
入内いてゝ帝しと
云容月若竹とかや
有うえども有れども
ち帝ひまして不死の
薬がおかく上天のひ
されぬふしのかしこき縁と
いつり王元之が竹樓記ふ
琴を劇るふよ後し琴調れ暢へ
又咸平二年八月十五日ふ記をかれ
しも月夜と賞しけるふ
け赫奕姫と竹樓記ふ書遺されし
ゝろひろる憾うゝをや

石田友汀画

駿河
吉原

鄙まで三里六町吉原驛より東南の方ふもとより延宝八年八月六日暴風烈しく潮水滿より津濤して家屋漂流し人馬溺死その事多し天和二年の春此地ふ移れり

富士山 四海無雙の名山にして駿河甲斐相摸三國ふ幡るといへども駿州富士の郡よりこれを富士ふよそふ

本朝文粹

富士山記

富士山ハ者。在駿河國ニ峯如ニ削レ成一。直ノ聳テ属レ天。其高サ不レ可レ測ル。歷ノ覽ニ史籍ノ所レ記。未レ有下高キ於ニ此山一者上也。其聳レ峯鬱起。見ニ在テ天際ニ臨ニ瞰スル海中ヲ一。連レ亘リ數千里ノ間ニ。行旅之人。經ニ歷ノ數日ヲ一乃過ニ其下ヲ一。盤リ去レテ之ヲ顧望スレバ猶ヲ在ニ山中ニ一。從ニ山峯ニ一落ニ來ル珠ヲ一。盖シ神仙之所ニ遊萃ス一也。承和羊中ニ有ニ小孤ノ一。盖シ是レ仙簫ノ之ヲ貫リ珠ヲ一。玉ヲ一也。又貞觀十七年十一月十五日。吏ー民仍テ舊ヲ致レ祭ル。日加レテ午ヲ天甚タ美晴。仰テ觀ル山ー峯ニ有テ白衣ノ美女ニ人一。雙ニ鵜ノ山ー巔ノ上ニ一。去ル郡ノ名ヲ一。巔ノ一尺餘。土人共ニ見ル古老傳テ云フ。山ノ名富士ト取レ之ヲ一。郡ノ名ヲ也。山ニ有レ神ノ名淺間ノ大神ト一。此ノ山ノ高キ極ニ雲表ニ一。不レ知レ幾ノ丈ヲ一。頂上ニ有リ平地一。廣サ一許里。其ノ頂中ー央窪下テ。體如ニ炊ノ甑ノ一。甑ノ底ニ有リ神池。池ー中有ニ大石ヲ一。石ノ體驚奇宛モ如ニ蹲ル虎ノ一。亦其ノ甑ノ中常ニ有テ氣ヲ一。蒸シ出ス其色純ー青ニ。窺ニ其ノ甑底ヲ一。如ニ湯ノ沸騰スルガ一。其レ在テ遠ニ望ム者ヲ一。常ニ見ル煙火ヲ一。亦其頂上ニ匝レル池ヲ一。生レ竹ヲ。青ー紺ノ叢懍ノ宿雪春ー夏不レ消。山ー腰以下生ニ小松ヲ一。腹ヲ以上無レ復ヲ生ニ木ヲ一。白沙成レ山ヲ。其ノ傳ヲ一。攀ル者止テ腹ノ下ヲ一。不レ得レ達レ上ニ。以テ後攀ル者ノ居テ役ノ士ニ一。得レ登ニ其頂ニ一。

都良香

登ル者ノ皆黙ニ頽ヲ於腹ノ下ニ一。有ニ大泉ニ一。出レ自リ腹ノ下ヲ一。遂ニ成ス大河ニ一。其ノ流レ寒ー暑水旱無レ變ス。有ニ盈ー縮ノ一。山ー東ノ脚ー下ニ有ニ小山ニ一。俗謂フ之ヲ新ー山ト一。本ハ平地也。延暦廿一年三月。雲霧晦ー冥ス。十日而後成レ山。盖シ神造也

万葉

○天地之分時従神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之陰毛隠比照月乃光毛不見白雲毋伊去波伐加利時自久曽雪者落家留

山部宿祢赤人

望不盡山歌并短歌

○田児之浦従打出而見者真白衣不盡能高嶺尓雪波零家留

同

返歌

新古今 白妙之

詠不盡山歌并短歌

高橋蟲麻呂

○奈麻余美乃甲斐乃國打縁流駿河能國與巳知其智乃國之三中従出之有不盡能高嶺者天雲毛伊去波伐加利飛鳥毋翔毛不上燎火乎雪以滅落雪乎火用消通都言不得名不知霊毋座神香聞石花乃海跡名付而有毛彼山之堤有海曽不盡河跡人之

同

渡毛其山之水乃當烏日本之山跡國乃鎮十方座
神可聞實十方成者山可聞駿河有不盡能高峯者
雖見不飽香聞

返歌

同 不盡嶺尓零置雪者六月十五日消者其夜布里家利
同 布士能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽斗田菜引物緒
同 吾妹子尓相縁乎無駿河有不盡乃高嶺之燒管香將有
同 阿蔽良久波多麻能乎思家也古布良久波布自乃多可
禰尓布流由伎奈須毛
同 妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺燎乍渡
同 安麻乃波良不自能之婆夜麻已能久禮能等伎由
都利奈波阿波受可毋安良牟不盡能禰乃伊夜等
保奈我伎夜麻治乎毛伊毋我理登倍婆氣尓餘婆

受吉奴

同 可須美為流布時能夜麻備尓和我伎奈波伊
豆知武吉氏加伊毛我奈氣可牟

拾遺 多平振神も昔はつれなく歸ての事もあり
詞花 月かしに山路のさの小時雨ふる跡の雪しそのこる
古今 君といふ人まれ人まれ婦のみやこにしあらねば
同 婦の子のあねもひふとえ人しれぬ思ひをするが
同 人しれぬ思ひをすれば夕されば燃つゝ居りぬ
後撰 志ふの浦の浪間の山もる月の影のひまなく
續後撰 婦一の祓を誰かうけつる昔の影のひまなく
玉葉 あふ坂の關やいくへに成ぬ東路や三國をさかひ
風雅 田子の浦ふみそなもやぬ立つゝ絶めをやの煙こそ
同 婦一の祓を時しも空にいつるれくすゑ白雨の雲

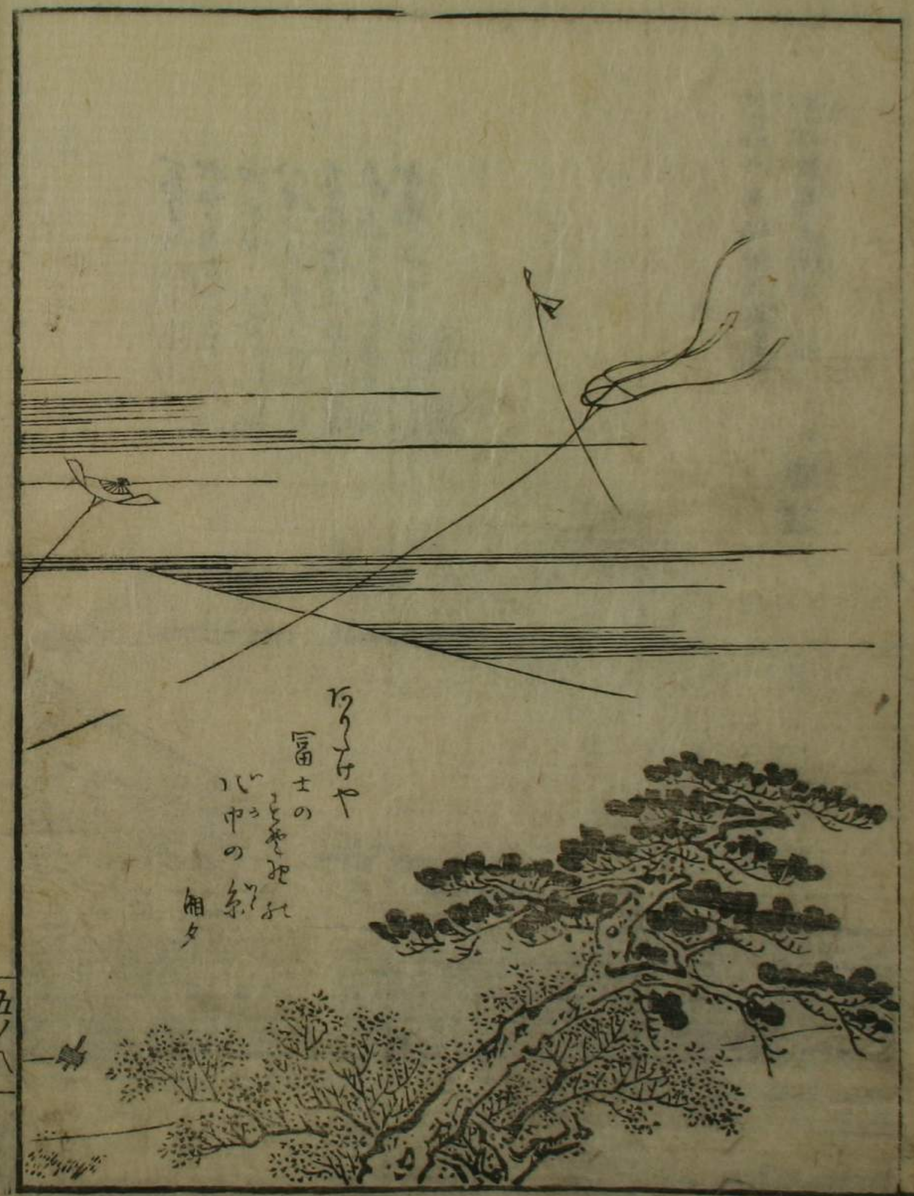
人丸
大江嘉言
藤原忠行
紀のめのと
後人加入
古今
法皇陽成
東三條正
院
惟宗光吉
朝臣

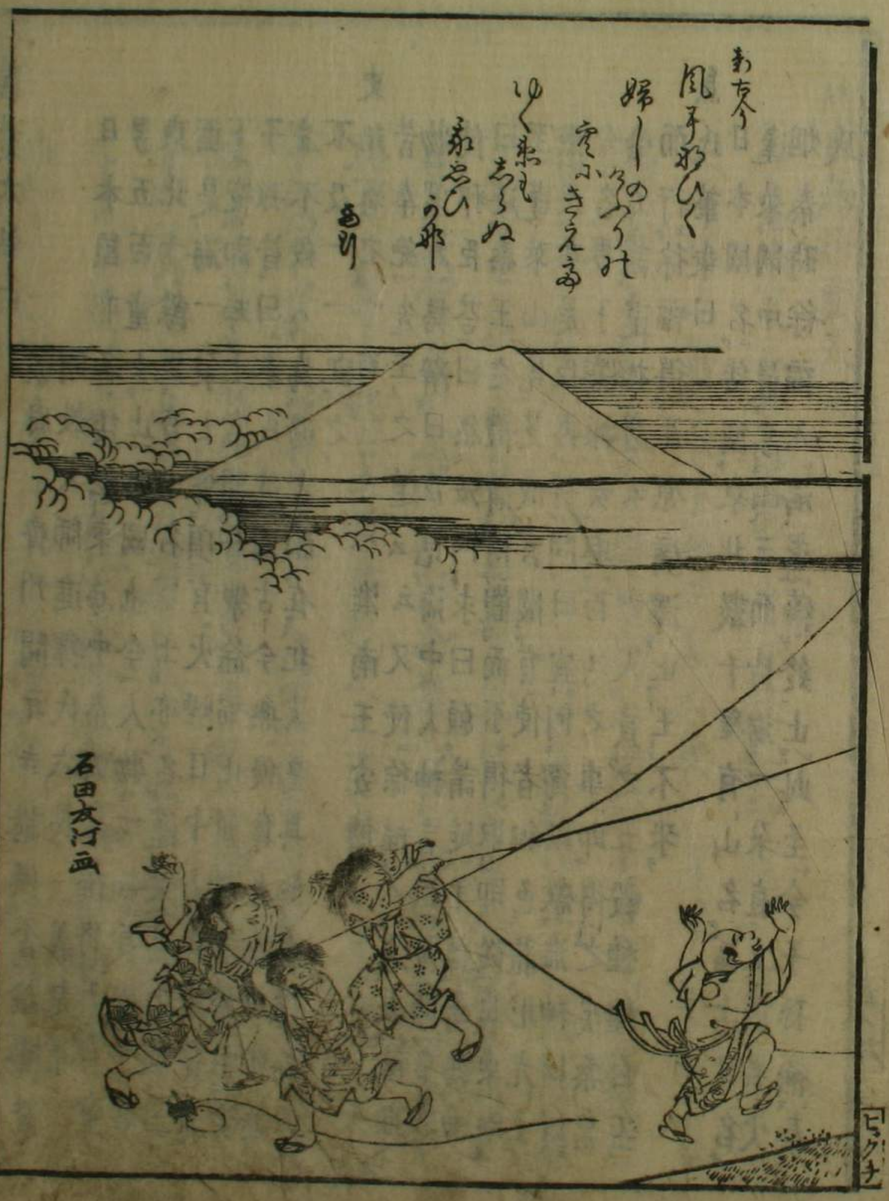
題池生富士山圖

裏高千尺望晴絲
稍霽峰巒影參差
秋光餘興三半色
始知千里一勞君

大典禪師

寛政丙辰秋九月過駿河
吉原驛望芙蓉景　原在正寫


凧や
富士の
ふもとも
いなかの
糸
朝夕


凧あげ
風まかせ
ひく
娘一人の
ふりみ
空ふきえも
ゆく糸も
もつれぬ
糸のどけき
春の日
石田太汀画

義楚六帖曰

後周齊州開元寺講倶舍論賜紫

明教大師進釋氏六帖　義楚集

日本國亦名倭國東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此國也今人物一如長安中暑東北千餘里有山名冨士亦名蓬萊其山岐三面是海一朶上聳頂有火煙日中上有諸寶流下夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆日秦氏彼國古今無侵奪者龍神報護法不殺人為過者酛在犯人島其他靈境名山不及一一記之

史記巻之一百一十八淮南王安傳

昔秦絶先王之道云云又使徐福入海求神異物還為偽辭日臣見海中大神言日汝西皇之使邪臣荅日然汝何求日願請延年益壽藥神曰汝秦王之禮薄得觀而不得取即從臣東南至蓬萊山見芝成宮闕有使者銅色龍形光上照天於是臣再拜問曰宜何賫以獻海神曰以令名男子若振女與百工之事即得之矣秦皇帝大說遣振男女三千人資之五穀種種百工而行徐福得平原廣澤止王不來

焦氏筆乗日

日本國名倭國東北數千里有山名冨士又名蓬萊國中最高山三面皆海一朶直上頂有火烟秦時徐福入海求藥終止此至今子孫稱秦氏

竹取物語登天段

かく姫いふ爰にも心にもあらでかくまかるにのぼらんをだに見送り給へといへども何しにかなしきに見送り奉らん我をいかにせよとてすてゝはのぼり給ふぞ具して率ておはせねとなきてふせれば御心まどひぬ文をかきおきてまからん恋しからん折々とり出て見給へとてうちなきて書ことばは　此国に生れぬるとならばなげかせ奉らぬほどまで侍らで過わかれぬる事かへす〲ほいなく衣をぬきおく夜は空見給へ月のおもてん夜とも見おこせ給へ見すて奉りてまかる空よりもおちぬべき心ちすと書おく天人の中にもたせたる箱ありあまの羽衣いれりまたあるは不死の薬入れり一人の天人いふつぼなる御薬奉れきたなき所の物きこしめしたれば御心地あしからんものぞとてもてよりたればいさゝかなめ給ひてすこしかたみとてぬぎおく衣につゝまんとすればある天人つゝませず御衣をとり出てきせんとす

月の出岩尖りて人と交
にくべきよしにて
不死のくすり理のにが
所のようけなるもろ
もん其山成神の山ともを名
もろのほとりに雪
富士の山これ立
新古今業平朝臣
眺ともめ山ともを富士のみ
其山いまなほこゝに
てなりいにしへの

新古今
名をのみ
聞しの
いつさうら
そらく
ふるの
右大将頼朝
ふもあての
ありそぬ
そらふしの
淡海
大菅中吉文

さらしなの記
其山のさまいと世にみえぬさまなりさまことなる山のすかたはこんしやう
をぬりたるやうなるに雪のきゆる世もなくつもりたれは色こき
きぬにしろきあこめきたらんやうにみえて山のいたゝきのすこしたいらき
たるよりけふりはたちのほる夕くれは火のもえたつもみゆ　云云

いさよひの記
ふしのけふりの末も朝夕たしかにみえし物をいつの年より
かたえしとゝへはさたかにこたふる人たになし
たかかたになひきはてゝかふしのねのけふりの末のみえすなるらん　阿佛

古今の序の心をおもひてよめる
浮乃世のことはのちりかふしのねは雪さへつもれ山となりけん　同
くらへ見よ此[illegible]ふしのねも[illegible]　同

新續古
浪に[illegible]ふしのみ雪は消る日も[illegible]室の山の下葉　順徳院

新勅撰
ふしのねをこゝにても空にしらるなり雲より上にみゆる白雪　守覺法親王

新拾遺
時しらぬ山郭公五月まて雪ふるふしのねにやなくらん　祝部行氏

新後拾
ふしのねをよそにけ見れは白雲の[illegible]　藤原長秀

家集
人しれす思ひするかのふしのねの[illegible]　伊勢

月清集
ふしの山[illegible]ふる雪の一日も夏になる空そなき　後京極摂政

家集
焼人もなしとふしのねの山雪のうちより煙たえせて　源重之

万代集
舟とむる田子のうらはの夕しほにふしのけふりの[illegible]　紫金臺寺入道二品親王

家集
草ふかみ[illegible]螢の火とみゆるはふしの煙なりけり　大中臣能宣

新六帖
するかなる[illegible]高ねの雪の色にまかへし　前大納言為家

光行紀行
田子の浦にうちいてゝ冨士の高根を見れはときわかぬ雪なれとも
なへていまた白妙にはあらて青して天にそひえたるすかたこの山よりも
たかくみゆ貞觀十七年乃冬の比白衣の美女ふたり山の嶺
にならひまひしと都良香か冨士の記に書たるいかなるゆへにか覺束なし
冨士乃根の風にたゝよふ白雲はあまつ乙女の袖かとそ見る　光行

曙記
このよの名残なく空はれて冨士の麓まて雲もかゝらす春の霞もなく

間ふさぎ曙さへ春かすみ物さへ御旅宿うち
ひ詠せられてまことに々ふるやそしまの色に御定有けるに
富士の御當座あまた御詠　二條
左相府
なも谷の
おろくはまことひすゐの
あけぼの春見えむ神のまがりれ
御うねを山口もろくみびかうん
八重かすみたちもかくさて神のしの山
東紀行
帝掬嵐霜雪置之扶桑東
突兀五千仞芙蓉秀碧空
人こそいうべけれ
神の称の雪吹ぞ風ふくむこる深谷の原

光廣公
同
秋玉山
琉球人
遺谷山王ヨ
同

詠富士山　嶽色遙浮遠客航擬従高處振衣裳
環形屹立雄天地積氣常寒擁雪霜
瑞靄清籠池上竹瀛光低襲海中来
詩篇恰有愚公力移得羣顔入彩囊
右
朝鮮人李礥東郭詩
次日本随月
云

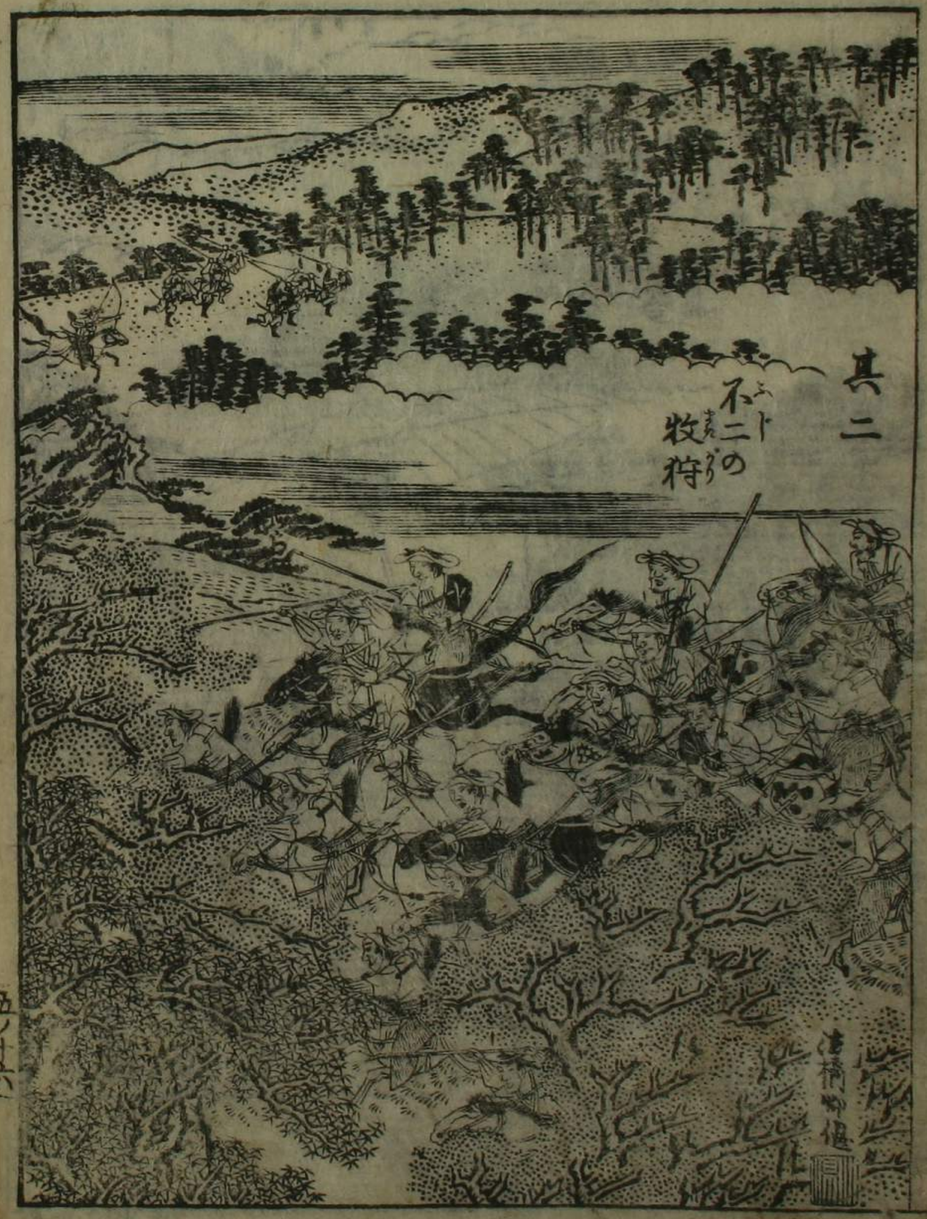
えた日の見る物ゆせん婦ーの女
富士の山ゆさくさ三月七日八日の
日ゆかくる時やまの
不二の繪贊
三帆舟を墨風ゆ形るかたみゆ
富士の名ひ日ゆいつもゆ高ー桃の色
百富士やまも
あけき日や空ゆ
四萬八千丈富士ーの名

宗鑑
湖青
信徳
くせ
其角
加賀
ゟ代
雷圖
佳棠
雞禽

武衛頼朝卿ハ烈風の靖度ハ
従二三國ハ及ひあと富士ふもと
牧狩ニ一ゆふ人も
實ハ征夷將軍の
ごとくなり

注前ゆ倣

此先の
源頼光公ハ
大江山の鬼神を
退治ゐらそ
給ふ狩衣の姿ハ
いと殊勝なり
同月の海ふかくハ
着ふかく着こなし
迫つゞきたる
ものなり



其二 ふたつの牧狩

其二

曽我兄弟夜討

支冨士ハ芙蓉と歸る事八の峯八の谷あるく其體八葉の蓮華
小似ゟ不二ゟ都氏の富人郡の名ゟ取ゟ生ゟ駿甲相の三國ゟ跨ゟて嶺を十五州の壯觀とて
青天忽見素羅笠羅笠擔中十五州と惺窩先生も咏ひゆひ又石
川丈山も雪如紈素煙如柄白扇倒懸東海天ゟも賦一京師の四明大
和の金峯ゟも見ゆる尚も肥の崎陽ゟ百里ぢゟ漕ぬく大洋ゟ
冨士峯見ゆく外夷の舡我邦一波海の的ともやで聞ゆむし
孝安帝九十二年ゼ山初ゟく現ぢゟ又孝靈帝五年ゼ州琵琶
湖と倶ゐ一夜ゟ現ずともいひ傳ゟ或說ゟ大ゟ一山雲霧除
くていまぢ現ぢゞ人民もぢくて易ゐ也ゟ事ゟ孝靈の湖
時初ゟく高ゟ見ゐ顯一ゐるとぎゟれ共も都氏の記ゟ入ざ
れ正說ゟゐゞ奉朝の高嶺ゟて絶頂ゟぜ九里餘直ゟ立ゟ
高サ積ゟゞ都て一千丈ゟ見ゐて小斗小迫一峯の貌妙ゟて業平も

塩尻小似ゟ也ゟひ貴夫ゟ雪ゟ載ゐく萬葉ゟ詠ゞ嶺ゟ平原ゟく
其中ゟ鳴沢ゟて凹ゟて艷の必一底ゟ池ゟり今ゟ水涸て形一虎
石ゟて虎の蹲ゟた似ゟる石ゟあゟゟそ夜漑ゟ旭ゟ耀一星ゟゟ三尊佛
ゟ拜ゟ也ゟゟ邇ゟ東北ゟ見下ぜ海面幽ゟて鳥嶼波ゟ卧ゞ鷗ゟ遊
西南ゟ只雲霧朦朧ゟて水ゟ空ゟ見ゑりゞ山路ゟ三の街ゟく
ゟもゟ也ゟる節ゟ有る裙野ゟ長ゟて百里ゟ行一形る尾の冨士見
原遠の汐見坂ゟぜゟ山の形相同ゞ三穂ゟ見神原ゟゟ也ゟ當て湯
たゟ原ゟ一原ゟ正面ゟて裾野ゟ解ゟく山趾東ゟ小長一三嶋
箱根ゟゟ伏龍乃貌小見ゑく鎌倉ゟゟ小の方一基近ゟゟ武藏野
ゟゟ西南ゟにゟて江府の赤坂驛河驛ゟゟ後興乃窓ゟ眸ゟ動一
日本兩國の橋上ゟ馬上の人乃首をめぐ驛河町乃名も富ゟ高ゟ彫ゟ
延喜式內淺間神社ゟゐ山乃神ゟて木花開耶姫ゟ祭ゟる氏命ゟ天ゟ降ゟ給ゟく冨ゟ櫻
乃御女ゟて瓊々杵の皇妃木花ゟ櫻花ゟ也ゟ櫻樹ゟ天ゟ降ゟ給ゟく冨ゟ櫻

詠ぜられまた縁ある三嶋を大山祇の命なれど土俗御鎮座ゆゑ
称ず水無月の神定を松明祭照らせる奉幣の方といひ教志だ
真砂の清き乃稲小筑くされば其夜又雷へ生る其音洗ふのごし
こそ雷ふ鳴沢の名ありまたその里人いふ富士の御神の祟ふ祭
みやこ我ぐ竹取物語にも竹とりの翁有て竹採ふ乃翁
ふ時其竹の中ふ三寸ばかり乃人ありいと美しく笑ひ青たる
後の間ふ生長し艶顔好る事限なし名くれば竹取翁
名付かくや姫といふ風土記ふもあるこれ嚆矢ふ
見へ詞林採葉にも天智天皇ふ仕給ひ倶ふ山嶺の窟
ふ遊れ玄妙の道を説給ふ天皇ふも帰依あつく寵愛せり
ふ酒れく岩ぐらの中ふ記し又桓武天皇かくや姫ふ恋ひ勅使をつ
されどもふ不死乃薬ふ献ぜよ天上へ登る由ふ
名ばかりふ乃ふのほる事もふ延ふも書り天智帝を東師御菊姫
より昇天のごとく御当の歩ふ沿ひ凌を築て陵村乃名今ふ
ふ浅し甲州の府ふ三河の嶺ふ見へ富士ふ法眼の霞乃如ぐいまも彩ぐ

小ふ大津宮ふ幸ふ山路ぐゆくとあり或人乃云富ふ天皇巡視ゆゑ
麻呂潟のかくうそ崩ぐゆくふ今も
ふと考られ秘蔵乃本と彩ん桓武帝陵ふ東師深草柏原よりうつす年
小建ぐといへども其所顕然ふ故ふ
お詔と書れしを荘ふ改ぐ寓言ふ雖没の契冲阿闍梨ふ實撲閣純
かうく著れ中ふ宣ひしふ古雅の名文ふて歌道の標ふ
白砂ふ誉ふ取後成卿をつたふ紀名ふ残ふ法師ふ五文字ふ貢
かゞ頼朝卿を牧将ふ武将乃威と朝
こそ幸意ふ達ふ常陸房ふ仏境ふ入仁田忠常ふ人完ふ名高く役
小角ふ朱履ふて歩ふ上ふをふい驟駒ふ駈空海圓珠も登山ふて
石佛ふ携ぐ深福ふ秦ふ事ふ嘶ひくまでに来り絶頂の鞍半腹乃崔
冨士杜の紅葉ふ二甘草ぐ英芭婦ぐ海苔冨士の八湖ふ倒ふ乳
と浸ふ甲州の府ふ三河の嶺ふ見へ富士ふ法眼の霞乃如ぐいまも彩ぐ

むる此東海道に富士愛鷹やうの山つゞき或通ふ其中を横走関と
いふあり愛鷹清見模走されば此富士乃三関といふむかしの道筋旅人こゝ
を通ふ重服觸穢もこれを愛鷹明神やく厭ぜのひ南海の中に出ぬ
ゆゑなる鴻ばし打よせ給ふ海道をおもふ其ゆゑしれ
鴻ばし浮鴻原といひ傳へたる拍三国無雙の名山と賞ず義楚六
帖ゐび宗學士が日東曲も褒く蓬萊山と歸る所紀の熊野尾の
熱田は山なる事それが中にも最上ぜして眞ぶ我邦の仙境梅福
九華眞妃も玄圃を憾多き事ぬる下

神社考

安天皇九十二年六月富士山涌出ス初ハ雲霞飛来如ニ穀ノ聚ル一魚ニ一ノ嗽ニ一ノ後頂上ニ五盤石出ツ其落下レル而曰フ富士山ト形チ似レ合ニ一蓮一華ニ一絶八層ニ中央有ニ大窪一窪底ニ湛ニ一池一水ノ色如ニ一藍ノ淀レ物ヲ飲レ之ヲ味ト甘ク酸ヲ治ス諸疾ヲ池ノ傍ノ小穴ノ形似レ初月ニ一穴中或燃ニ出シ黒烟ヲ一雨ス土沙ヲ或白雲金一光映ニ徹ノ現ス鬼神ノ形ニ一赤黒色、羔和三羊ノ季春重ニ珠ヲ一簫ヲ雨ス玉ヲ四方ニ一貞觀五羊ノ秋白衣ノ神女出現ノ雙立テ舞遊ノ時ニ火ニ一炎揚ヲ有ニ一圓光ニ一即祭レ之ヲ号ニ火ノ御子ト一古老傳云昔大綱ノ里ニ有ニ老翁嬢一共ニ居翁愛レ鷹嬢飼レ大後住ニ乗馬里ニ作レ箕ヲ為レ業ヲ一竹節ノ中ニ得ニ一女ニ一其長一寸餘奇之ヲ裹レテ綿ニ養レ之ヲ経テ十六月ノ漸ク長成能行歩ス美女ヲ一詔ニ諸國ニ一撰ニ一求ス時ニ天子ニ一負ニ端厳ヲ一言ニ一語ニ和雅ニ容ニ一儀ヲ一令レ獻レ之ヲ采女使者至テ駿河ノ國富士ノ郡乗馬里ニ一宿ス翁宅ニ終夜有レ光使者怪ニ一問テ曰何ノ故ゾ道ニ一夜燃ニ火ノ老翁答曰我女之光彩也使者窺レ之ヲ女ノ不レ從カ使者奏ス天子ニ一求ル女ヲ一其女甚美也誠ニ深シ雖レ然我久不レ可レ住ニ一今レ我ヲ登レ山ニ去ニ一毋ニ一云ニ一毋曰ク親子之愛養育之恩誠ニ重ノ慕ニ一思ニ一已而乃上テ富士山ニ入ル巌嵓ニ一天子大ニ歎遂ニ如レ何ン女云常ニ来テ相見ル其事ニ一于時女語テ父ニ一曰ク事ニ雖レ重ノ不レ可ニ一棄ニ一乗馬里ニ翁曰ス其ニ一玉冠ヲ留ニ一此ニ一處ニ一潮進ル陟ル嵓嵓ニ一女子住ニ一此ニ一因ニ一共ニ出迎ニ一微笑ヲ一曰ク額ニ天ニ一玉冠ヲ所レ在ル積ル石ヲ以為レ陵ト云延暦二十四年立ニ一大神ニ一平城天皇大銅元年鷹ニ一明京ニ一所ニ一謂ル翁者愛鷹山今謂ニ二神ニ一共ニ住ス新富士鳴澤

万葉 佐奴良久波 布自能多可奈流佐波能其登

續古 ○ふり立思ひもよらぬ雨ぞふる
新拾遺 こみさる妻こ乃野ら沢越くる炬ん
○ 能有るやひとやと時沢風越く清見ら関小鞆おかく
主水 紅葉ちる十一の時沢風越く清見ら関小鞆おかく
○ さみれを高砂も雲のうちみくるさい富士のたく
無名抄云 五條三位入道ハ此ノ歌ノ長者ニテ給ヒケレバ時沢ト云ノ
好ることよみくやなさの入道ハ久シク契れるひーくいくき此道乃
遺恨ちく好ん仲まれほとの事ちうやねしおとひ
ちうやまでふこそ

藻塩草云一説ニ住吉沢小あんとも事あり其ノ詞ニ曰ク
一定なり人のおるふけれくいとこそ

一夜の間ハ上古とそ云

田子浦 田篭おろひい田児ーも書ん都ちく清見真津ちむーほ鴻の原と
万葉 後居而戀乍不有者田籠之浦乃海部有申尾
珠藻苅々

拾遺 田子乃浦小かくのちくよりほ乃煙とやそーん
右今 ちかちる田ちの浦波やめぬ貝あれもちふひぬりな
新古今 沖津風表むふれや田ちの浦のあ母ーほ乃煙ちる
續拾遺 田ちれ乃風の寄ちて埋むーの称乃ちもちくれ母ちる
風雅 たちも浦乃りほちゃぬ五月雨小絶ぬふーの煙ふろ
新拾 五月雨乃ちるにのむーの
續千載 旅人のたゝね日もかーあ
草庵 あちれ浦ちふーの
家集 ○ふ恋ひ野くちくよりほちる多る田ちの浦波
新選内裏ニ侍ル時色紙形ニ
白波の又ちる方ちくく極ちくふ小ちる田ちの浦波

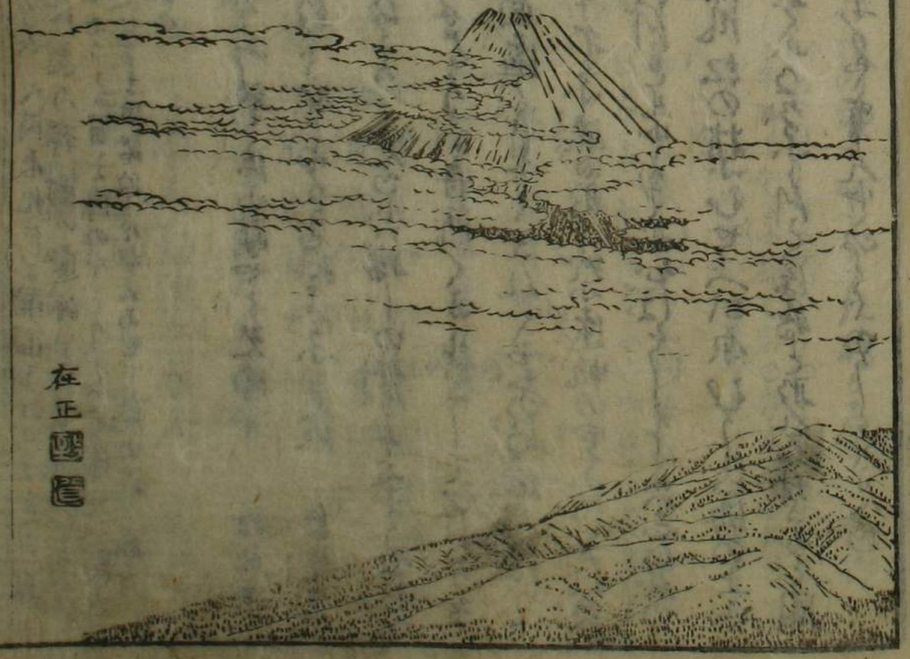
富士の根乃雪の野ちくよりほ乃煙とやそーん

焦ハ思ヲ塩ハ竈ノ煙ニ空ニ炮ノ世ハ路ハ難ハ最モ耐ヘ兼ネ隣ニ
坐ハ愛ニ風ハ光ヲ多ノ子ノ浦ハ潮ハ汲ニ月ハ明ラ還ル

續日本紀 天平勝寶二年駿河國守猶泉造東人
等於部内蘆原郡多胡濱獲黄金獻之云云

田子浦

僧六如



富士沼　右原の北にあり富士八湖の其一つ丙辰紀行に羅山子のいくるを一の墓
徳寺村今は合併して入沼と称す東西三里餘もあり
抜ずるに昔は此邊東西三里餘もあり
軍勢此鳥の羽音に驚き眼近き
ちにく漁しより種々四五屋相永の
茶屋ありし
主本　春草かりこくる成小くろ馬牛沼小駒やとめ
有沢百首　深潟原にて　源仲正
水もろ紀州の小の沼のよ
光行紀行　深潟原をいくくよりも
ふて空もかなりなり
おくそうきて南は海の面遠く見さされく雲の消燈の浪いと
なくさき眺なるをぐく孤島のまれ
臨むの形さかるさの眺を
くう絶くえつうく浦風松の梢ふむせ
うひく蓬莱の三山の鴻のめく
ふもおのくく神仏のさへ

主本　歌うの七波の入江乃姉の根の煙も空ふうん
左富士　右原驛より五町許東の方中右原とり入所よりあを町半の間纔に
左富士　左富士とうたれいに戸うり
行くまるに於く道の非縄ありく
東師よりに府小赴く時を又こ
元吉原　今の右原駅初いまくあり
宗の寺あり又毘沙門堂あり
肩上小祠を徳王乃尊像をの初いに戸ふあり
又香久山稲荷明神の祠あり
鏡石　妙法寺毘沙門堂の前小
手児呼坂　元右原四丁程ふあり八雲御抄主本集藻塩草
俱小阪河國小入
万葉　安都麻道乃手児奈波
安禮婆古非牟奈能
同　安夜麻豆麻治乃手兒牟
主本　可古要氏伊奈波
欲婢佐可古要氏
智波安比奴登母
欲妣左賀古要我祢氏
持里波奈之尓
ゆら氏と遠方人の聲かくせ
寶治百首　紫式部
いまこそ名こそ鳴へあれまつ
要石　一本杜村の濱をふあり傳小石造乃祠あり高潮打上る時氏石より
要石　来る事乃如ふ要石の名あり氏急ふ
地震鯰氏遊する事多し海濱乃民家して初夏の比より
騒狼天氏深む乃時京地こして伊豆の岬より見へ

原駿のわくらう一年ぢゅうあちこち漁家あつて初穂とるはい磯ぬ出るあじそこのうる聲めづらかう故郷に二十里長江十二風と仙もろもしやうのあるべし

拾七

つくろ海の
波みしぬとも
浜鳴ハ
わすれめつくろと
ふの
頼まん
よつの

芝瀬川 風土記小松より土人云猪頭村より流おくり下流八百士川と會して和泉より芝川と詠れ此川筋より小菅沢生ず歌謂芝川のこと百士海苔もとれおり

実本 箕もる狩ごろもの水の月さえ夜ぬ浦の芝川

家集 高根より清ぬ雪や流るらん月かおそふる婦しの芝川

坂原河 (小ぬ百士沼南より大洋灘へ流れ出る小川なり歌枕にも名あり歌に百首歌合に蕭原もれ八百士里半)

新勅撰 おのが共関路絶ゆと思ふらん人もとはぬに雪の降つむ

風雅 吹ちらす木の高林の朝風に袖さえ暮て雪ぞ降ける

新拾遺 白妙の木の下風も絶ぬれば雪に埋る谷の菴

ま本 あひ人の道もくれもりぬ雪やよに埋る原

同 木の根より袂も氷かけて鳴麻の聲もこほる谷原

建保百首 ふきしをるあらしも雪もさえ暮て有明の月の深山原

順徳院 さよふかき聲をさえ暮て雲の波をも浪のよするかた見の浦原

正三位知家 雲の波をも浪のそこ氷て霜うれもる浦々の原

従二位行能

千五百番 にの川淵ち氏雪ふれおく見ぬ波ふむ心地ぬる原

家集 よの中にわれうき鴛乃ひとり見ぬ波ふむ心地ぬる袖哉

行慶 是皆浮鳥か原此ノ生雖歳身ヲ尚ヲ未ン蔵影ヲ歸去ル来ヲ無月ノ村ト貞應海道記 うれしき原氏もれる名をう袋ましく聞れど雪ふる海中

法眼顕昭 そふ人も野径とも住ぬ千草むすひし本の林あり遥ふるれそ人煙

泰儀雅経 片々と絶くる人の新樹径氏深て隣たりふ深し東行西行の客

澤菴和尚 白隠禅師蹟 原の驛鶴林山松蔭寺とし禅宗海家氏僧を當駅中ありて歳智聰明の寺寺へ十九家の時れ菴

妙心寺より得道一糸師ふ受り諸山ふ百ノ又尾の名護屋ふ止まりて菩提の妙理氏究め三界門とおく四衢の道ふ至り近世の縁深り終ふ明れ五年十二月十一日寂八年八十四歳の時御迷の雪多し世ふ行ふ事二代遂綸和尚も亦禅師と号れ白隠和尚行状ふ委し左ふ著八

白隠禅師語錄中頌古 清浄ノ行者不ン入ニ涅槃一 間蟻爭ヒ引ク青蚨翼ヲ 山婦棄ツ籃ヲ多ク菜色ニ 新燕並ヒ休メ楊柳ノ枝ニ 村童揃ヲ簸ヲ折ニ疎籬一

白隠和尚

偈頌

深山佛法

深林漏月寒猨叫。舊巣受風宿鶴鳴。
烟靄輕浮補岸闕。藤蔓倒掛引薪行。

白隱和尚

示徒

浩埋自性葛藤窟。刺殺已靈荊棘林。
青菓黄菌白蘿蔔。紅爐猶泣止啼金。

同

或問死後斷滅乎不斷滅乎予云

即今問著底是斷乎是常乎又示偈

夢裏明々有六趣。了時無一點精魂。
善星纔起斷常見。生入泥犂永劫昏。

同

駿州原驛松蔭寺

勅諡神機獨妙禪師白隱畧行状

師諱惠鶴。號白隱。駿州原驛人也。俗姓長澤氏。以貞享二年臘月廿五日生。幼而韻達。年甫十一。隨母聽僧談地獄苦報。忽發求法之願。年十五歳。辭父母出家。因松蔭寺單嶺傳公薙染。十九歳。叅問于諸州老禪。三十一歳。歸鄕嗣法於透鱗承公。遂往于松蔭寺。元文五年庚申春。許唱虛堂録。妙機英發。名聞于海内。參學之徒數百。後應四方之請。講評經録者凢五十會。帝子諸侯延師聽法無厭歳。明和元年甲申春。就本院提唱大應録。參徒以千數爲。五年戊子冬。惟疾端然而寂。實十二月十一日也。享年八十四。瘗遺骼於寺巽隅。扁塔曰荊叢。嗣其法者。龍澤東嶺延慈。松蔭遂翁元盧也。所著槐安國語。闡提記聞。息耕録普説。荊叢毒蘂。及國字法語。遠羅天釜等若干巻。行于世。

明和六年六月八日

勅諡神機獨妙禪師

師歯迫山（しせなやま）

深渇原の側にあり

万葉 荒熊之住云山之師歯迫山責而雖問汝名者不告

夫木 わく風の我れしかくすなかあふさを瀬山もいかにかけしかへらん 従二位家隆

興國寺古城（こうこくじのこじやう）

原の東今沢村の左の方那ヶ篠山にありて当国太守今川氏の擁城也。亀の比甲州の武田梅雪の家臣僻坂掃部といふ者これに居す。小田原合戦の後中村式部少輔小氏国を賜はり家来川毛兵左衛門をして居らしむ。慶長六年天野三郎兵衛康景拝領して此所に居す。同十二年三月九日天野が家人同国原田村の郷人と諍論して是を殺す。代官井出甚助聞之官に訴ふ。康景が非道露顕して改易せらる。其後当城破却に及べり。

阿野禪師古蹟（あののぜんじのこせき）

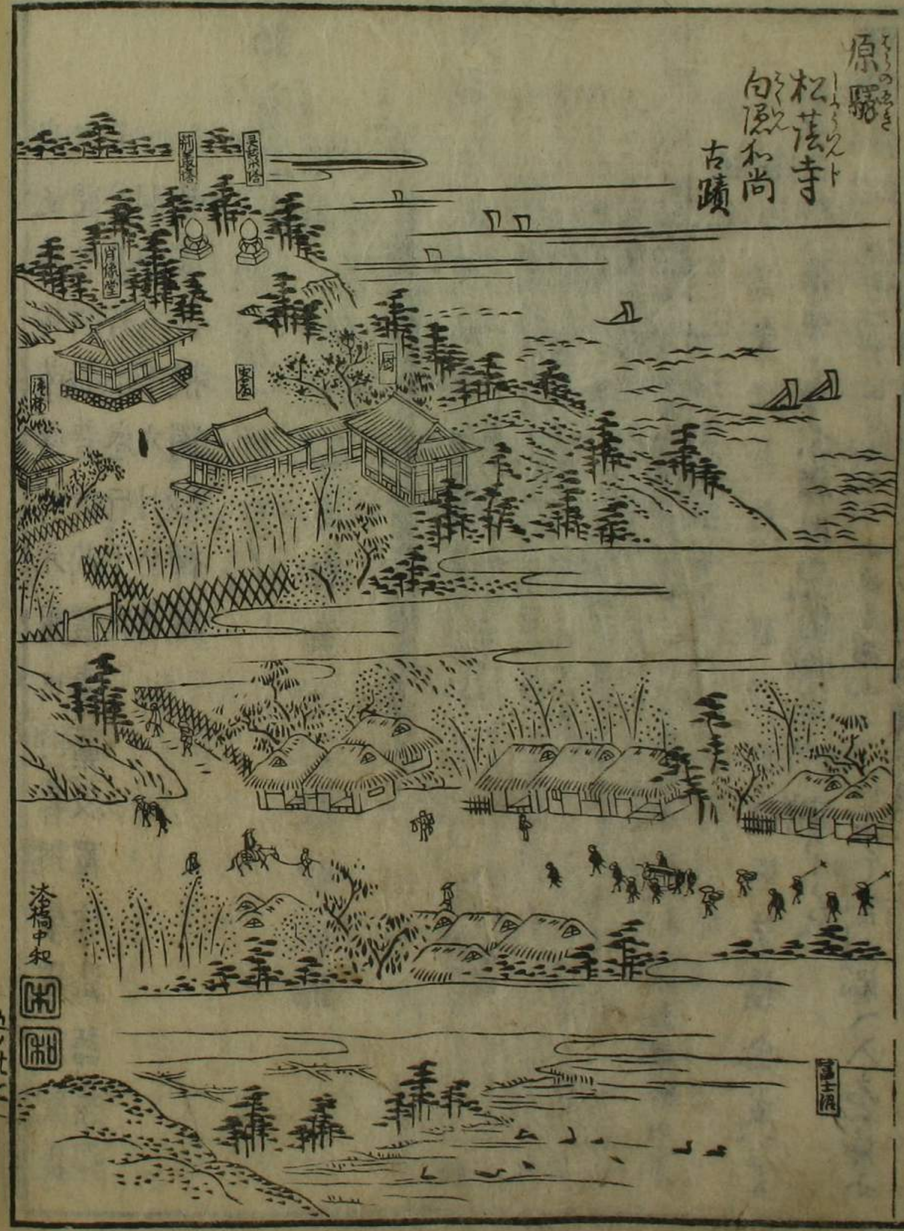
足柄山の麓井出里にあり。此禪師は右大将頼朝卿の弟にて阿野禪師全成といふ。

東鑑云
建仁三年六月於下野國誅阿野法橋全成云云

以井出村大泉寺といふは禪師の遺物を什寶とせり

阿野細江（あののほそえ）

阿野は井出村にあり。水源足柄山より流れて富士沼へ入又海へ注ぐ。藤塩草子に見えたり古歌聞え侍。



井出館古蹟　井出里をいふ右大将頼朝に富士の猟場にて久しく逗留し給ひ御館ありし所なり其時曽我兄弟父の敵工藤祐経を討れしかども五郎丸は生捕られ庭上に引る右大将直に対面有て誅せよ由其比十郎祐成が寵愛の遊女井出館とよんで三浦荒次郎義澄に預置しを十郎祐成が討れしを聞より井出の屋敷の辺にて自害せしと云伝ふ又いろは鳴が原ともおもはれしとぞ

露やのこ清水一あふぐきて尾花糸引枯尾を吹

竹下道　富士の裾野一説に獄下道ともいふ　源頼朝富士の裾野にて大猟有し建武二年十二月十一日新田足利の両将軍の御供にて一夜屋宿かる竹の子と道

風雅　あら礼山乃葉小竹乃そよ分て一夜屋宿かる竹の子と道

横走関　富士足柄の間にあり一説に東海道にはなし納言抄草紙に関は横走の関又朝野群載にも載せられず横ばしりと名ゆゑ歟

日　海ハ東小関の戸おく足柄の山本くらハ雲の下乃

まゝいふせんをくまそゝらう横走と富士の公役　源仲正

前九後三従遠征義光素良巧吹笙琴跡為遂源公子妙曲再聞玉鳳鳴

右愛鷹山記新羅三郎事熊尚之

新羅三郎義光八源頼義之次男也義家之弟也紙上豊永奥州小次郎後三年之軍功義家大将軍而義光為副将軍也時秋八月之比也義光為副将軍而義光為副将軍也時秋八月之比也義光為副将軍而義光為副将軍也時秋八月之比也義光為副

愛鷹山（あしたかやま） 又蘆高嶽は足高嶽は足柄とも書けり古来より名所集相模国とあれども冨士に連り原駅より近けれともこゝに載す京より小の方三里にあり読云延暦廿一年三月雲霧勝暁海に来十餘日にして此山出現せり故に新山とよぶ山頂の形孤峯の如し俗呼んで孤が嵩とりて愛鷹と冨士とのあはひむかしの東海道之見る関より冨士の裾野を通り足柄を歴て此にて箱根山へかゝる也此間に横走関足柄関あり今に旅人も此道ありて甲州の往還とす

万葉　とふさたて足柄山に舟木切木に切よせつあたら舟木を　満誓

新後撰　旅衣しくれてとまる夕くれに那は寒き夜を行あしからの山　従三位経基

玉葉　岩かねをはなるゝよりおちの高けれは雲のかよひち足柄の山　為家

新拾遺　あしからの山路の月に峯越てあくれは袖に霜を残せる　祝部成茂

足柄関（あしからのせき） あしから山上にて東海道にあり清少枕草紙に云関はあしからの関

新勅撰　あしからの関路越行しのゝめに一むらかすむ浮嶋かはら　後京極摂政良経公

続古　ゆきやらぬ関の戸さゝぬ御代なれは月にも越んあしから山　家隆

同　秋まては富士の高ねに見し雪をわけてそこゆる足柄の関　藤原光俊

新拾遺　しくれ行雲は外山にかけ捨て高くに越行あしからの関　卜部兼直

新後拾　行人の心やしれはあしから此関守袖もおもひやるらん　兼行朝

足柄神祠（あしからのみやしろ） あしから峠にあり　神主沖津氏

神社考云足柄明神昔赴唐其妻神独留守三歳明神帰朝妻神色白肥美明神曰思慕之情待帰之心必可痩裏今何肥而麗哉不思我也遂去妻神

冨士人穴（ふじのひとあな） 足柄山の麓に冨士に續きたるふじの人穴とあり建仁三年六月三日仁田四郎忠常鎌倉将軍頼家の命を受て冨士の人穴に入し事人口に膾炙れ

北條記云

建仁三年六月三日将軍頼家卿駿河国冨士の狩倉に赴きたまふ山の麓に大なる穴あり世の人これを冨士の人穴とぞ名付ける此穴の奥を見極めさせられんがためにとて仁田四郎忠常を召して重宝の御剣を給ひ此穴を極め来るべしとの上意也忠常畏って御剣を賜り御前を罷り立て主従六人穴の内へ入にけり次の日巳の刻に忠常人穴より出て帰り来る往還既に一日一夜を経たり将軍御前に召て聞召れ忠常申けるは此洞甚狭くして踵をめぐらす事叶はず纔に一人通るべくて心のまゝに進みゆかれども又其暗き事言ばかりなけれは主従手毎に松明を

炮ー互ニ聲ヲ合セテ沙汰小路ノ間ヲ流テ足ヲ漫ク幅幾ソ丈ト
リ〻浪ノ如ク火ノ光ハ驚キテ飛翔リ空ニ滿ヌレハ黒キ物世ノ
常ニ白ク幅モ亦少ノ〻ヒロクノ流ハ速ク小サキ蛇ノ足ノ如ク纏
ヒテ幸深ノ一カ所ヲ投ク切流シク進ミ行ハ小蛇ノ腥白ク眞ヲ衝テ
嘔噦セントスル時モアリ或ハ芳シク恵香リテ深ノ奥ハ
漸々小廣クシテ上ノ方ハ何ヤラン色透通ルク青ク氷柱ノ如クアル
物ニシテ見ユル即從ノ中小物小鳥ヲ申スヲ入レ鍾乳ヲ
石藥ニ仙人是ヲ取テ不老長生ノ藥ヲ煉ト傳聞ヘ心語ハ又歩ヲ足
乃下ハ小雷ノ如クニシテ千ニほり一同ニ聞ヘ絶ルヲ聞ヘハ是ハ
定テ修羅窟ノ音ナルヘシヲ思ヒ遣テ猶ヲ聞ヘントヨク
暗ク松明ヲ燒ー續ケテ廣ク所ヲ四方ヲ黒暗幽々トシテ
遠近ハ時々人ノ泣聲聞ヘ細ク事ヲ訴ルー連塗ノ旅路ヲ
向ハタドラン所ヲ知ラヌ所ヘ行ク事ハ鳥

七足ノ底ヨリ落ル水音ヲ其深ヲ測ラント欲ルニ定テ底ヲ
浸ー入ヲ見ヘ其水ノ早キ事矢ノ如ク冷ヤカ事極寒ノ水ノ如クニ
紅蓮大紅蓮ノ地獄ノ水ハ是ナルヘシ十川向ノ其遠サ七八十間モ有ラン其中ニ
松明ノ如ク赤ク光ルガー火ノ色ヲ見ヘ光ノ中ヨリ人ノ
姿異ノ衣裳ヲ着ケ冠ヲ戴キ笏ヲ持テ立ヘリ即從四人ヲ其ノ傍ニ倒ニ
忠常ノ御霊ヲ祭ル社ヲ建ル小祠ノ如ク死ル
給ヘル御姿ヲ拝ミ奉ル今ハ其川ヲ投入ラレシ御姿ヲ隠シ
生ケル如ク申ス頼家卿聞召カサレハ其ノ忠魂ノ命ヲ助ケ
重テ渡ー舟ヲ與ヘ給ヒ天地ノ外ノ世界ヲ定ク天地ノ外ノ世界ヲ定ク
ニ先ノ人々ヲ見ラレシ所ヲ見届ケ帰リ来ル事ヲ命ス
むりより逐ニ其中ヲ見ル事能ハス空ク帰ル事ヲ
帰ラルヽ時ハ將軍家ノ御身ヲ守リ玉ヘト申ツヽ
くしぎ松語ル

文覚房いそしめ院宣を
申しうく頼朝つゐに義兵を
揚させ給ふべきよし奏聞
六はらの禅閤小ぜ湯殿にて
頼朝にうり
給ふの趣ゝみぢかく
令と申くだり上人ハ源家
正家のつゝがなく
弱公えらく憚なきの
基しさこそ
阿羅漢向なり
仏道ゑりこゝ

八重山 所柄のかとうの山の歌をもめぐりくるくるおもひ所の地名よをおもひ

万葉 上總國朝集使大掾大原真人今城向京之時餞之歌

安之我良乃夜波也蘇故要氐麻之乎奈婆 郡司妻等

多禮乎可伎美等弥都々志努波牟

新千 さた今都も恋しく走り井関の八重山形波色こそ

名寄 陸奥国宮城野にありし頃

陸奥国宮城野にありし頃

九子神社 東間門村にあり延喜式内社 説条神國考之尊氏所の生土神これ例祭

二月十六日六月十七日

千年松原 沼津の駅の西南五反田村の海岸の松原沿ひて数千株ありしが代掛ひろく今の松林になりしは松原の千年松ありしゆゑ也

六代御前の石塔あり祖母の尼ときに謀せ分ちきゆ又縁起に謀せられよ

光行紀り

千年松原とうたひ海のうへさ遠う民松そる小生ひうつうてみうち

かげきよき時一枝ひちひく本の葉乃うをを分ちうま

又巻の千株の松乃下の旅寝幸一葉の舟よ中乃萬里の身と

縁とふれも是もそ旅と眺望をいひくまも勝うう

又さ世ほうその松乃もとをみうふたうを海の

光行

平家物語大意

さ行水小源四郎時政鎌倉殿の御代官として都小忠り平家のみ孫を

亡さんとて小松三位中将維盛卿の子君六代御前を十二歳小成のみと捜おし

六波羅ゟく暁小謀せんとさる所小高雄文覚坊と申命延びして鎌倉

小下り家早昔もさんぐも何の沙汰も取されば条時政六代御前の供

て建久四年十二月十七日暁雲井と餘東顧てさ六波羅の東洛々遠坂乃

関打さくた津の浦粟津さ原も打くく野くさ山さ宿々おもく

下りさ人脇河國中も成ーうさうさ

とうさ人所小御輿ぶ居させうあやうさ

馬ようさ乗で参う若君の御傍近く奉つく申されるうさ遠う文覚

の聖さゟ切髪ひ作ーまて給ひ山のあなさまたい鎌倉殿

乃御館中も許猛公ー近江國中ゟく共ひ奉せたる故源行ん一業所感

の御身形れい誰申共も叶ひせのひ作ーとやされ是ひ子兒角の

返事小も及ひねひ齋藤六代ーて宣ひるい宍賢故ゟ都小ゟう

我道て斬れたるこそ口惜けれ其故に終に涙おつる事もなし
氏有様伝聞の人々く歎悲あへり後世の人も感ずべし鎌倉まで送付
て上る北下小宮宣ひて二人の者共涙ながらく流れ良有て奇藤五
洞院押て申給へ君の神も仏も感ぜさせ給ひけん後命生て再び都へ
帰り上る道すがら共あはれをぞ催しける君今は角と見へ
し時御髪の肩小袿うち掛給ひ袖おさへ笑ひ給ふおく竜うち越て是
の人守護の武士共見奉せて那最惜未御公の世にぞやと袖を
濡の袖とぞ濡しける君小向ひ奉り高聲小十念
唱へ奉り頸延てぞ待れける将軍工藤三親後斬小掛れ
たり刀抜り側めたの方より差奉の御坂中を通り流小斬んとしるぐ因も
くれなゐ清果てぞく小見覚ぬ後不覚小作給へ小給ふ
られんとてたり刀投捨てぞ泣小ける北条是小宮小墨染の衣着たりける僧
小向ひ奉り駒小打乗て鞭刀打てぞ

馳たりける其後の者ども嗚呼最惜あの松原乃中そ世小蔵き君成
小條殿の兵今斬奉ぬやと所の者共むしくと走集りくれゐ僧公之多さ
小鞭刀揚て招きけるぞ猶も覚束おさ有ける北條子細有とて待所小
ぞ招きける北條子細有とて待所小武倍行ぬ馳来りる是乃馬より飛下
り奉差奉刀抜持ける鎌倉殿の御教書是小有とて差給ふ北條是成
抜て乃ち小誠や小松三位中将維盛卿の子息六代御前なりける高
雄の聖文覚坊の勧乞法小擬けん時頼朝と遊て御判
あり小條押乍らく三遍読て神妙之くと指置れけるこそ指置れけるこそ
乃ち小條家の郎等共もこれ小収の涙ながら流らくと其より都へ上
りける所存の外小悲しく思ひ給ひけん其より六代御前
鎌倉小條ら討奉ぬ聞へ上ける平家物語長門本にも頼朝の兵一人も殺さ
ず給へ斬られぬへしあり今も田越川のかやうの六代御前の墓あるらの
事平家物語是非分の咄
ぬ

曙湯の花香に斑女眠るの赤流みゝく
今もの湯あみの沢湯を俤うん
とくお肌ぬいて天花花実艶香み
小町紅松全法の匂ひこゑやうな
髪にほくもゝのひゝくゝたゞ
顔に緑瓜の皮乃
めゝくゝ旅客と
とゝていふかよ
旅の夜さおゝこ
もゞてゐるぐい
おゝこひゝ出
ちゝれいそゝり
やゝさゝ
猫ち
猫ふ毛ゝ
生てゐせゝ
ゝゝくゝ

お湯へ

春泉画

頼朝卿富士川
出陣の時源九郎
義経陸奥秀衡が
館なのびやま
ふじ川の宿そ
兄貴対面し
平治の乱より
絶く久くなつかしの
親と吟や春暁
しゆふくん詩ふ
棠棣の美鄂
とゝく華々
たゞざんぶと
燕そる半弦
仰ぎるい
ふもとそ

東漢

駿河 沼津

三嶋まて壱里半　当駅中髪結町に冨士浅間神祠あり　例祭九月十五日　又社頭に猿田彦神影石あり　又神賓に雌雄の鶏石あり　大サ三寸余○新田町に山王神祠あり　例祭九月九日　四日社内に冨士の牧狩の時用ひしといへる鉄釜あり　是は近代の作にて古物なり　沼津三枚橋町の小の地名也　東鑑に大岡及ひ車返牧狩御所と記せり

車返し

光好紀行　三枚橋いふ所を過て

車返しといふ里あり　何か家に宿りたれは　細釣なといと荒むいそよの棲や

衣の寝ろかとふさ床のさむしろもかゝるはなしの縛戒人の夜半

乃旅寝もかくやあらんと覚ゆ○

これを此所にてまかるに何の旨をかしといふありて袖ぬらさん　光行

貞徳紀行

車返しといふ所は此所より蟷螂か斧ちからにあたらぬ人はなしや　又あり

孩児が土城を作りて孔子に答へらるゝ小童の云車は家の在所をよきて通るとく車に乗らしそこ

のけし譲られたるに小童の旅中に小家を作りて孔子の通るとて下りて家の車

に乗る車をとれる孔子にあはれて車をかへしてかへりける

又勝母の閭をは曽子にかへしも誰もいかて通らん　曽子は孝の者のいふ家

車返しして嶮岨の地なれは大行路といはれし　よの道はきくなく

通りし　それも騎馬の害なれは　よく通る

折られ通りぬ

むかしあれは爰に車のくいちかひて所なれは小かきはなれん

冨士隠れ

沼津の東黒瀬松原二津屋あり地形大に低し愛鷹山に遮られて冨士みえぬ故にふしかくれといふ名はよし

亀鶴塚

二津屋の東石田村亀鶴山観音寺にあり白拍子亀鶴は建久の頃の風流女にして冨士の牧狩の時御旅場の座敷に来り工藤左衛門祐経と同席にまかりて我物語に見えたり此寺の観音は亀鶴か墓の所にして亀鶴か守本尊とかや

黄瀬川

石田村の東にありし一の駅なり遊女亀鶴ここに住し事　東鑑并に曽我物語なとに見えたり

東鑑曰

承久三年七月十三日上皇鳥羽行宮遷御隠岐國甲胄勇士囲御輿前後中略今日入道中納言宗行過駿河國浮嶋原荷負足夫一人泣相逢于途中黄門問之按察卿僮也昨日梟首之間拾主君遺骨帰洛之由答浮生之悲非他上弥消魂不可遁死罪事者兼以存之中若出於虎口有盲亀之命乎之由猶殆恃之處過同人已定訖之間只如亡察其意尤可憐事也休息黄瀬河宿之程依有筆硯之次書付傍

今日スグル身ヲ浮嶌ノ原ニテモツヰノ道ヲハ聞サダメツル　宗行

於菊河驛書佳句留萬代之口遊至黄瀬河詠和歌慰一旦之愁緒云云

宗祇終焉地

黄瀬川の東壱里許に桃園山定輪寺といふ所にて終をとりて葬る　宗長記に見えたり　又箱根早雲寺にも墓あり

辞世
ろおろ〳〵や鶴の林のとくれなゐの身そそらみ
自画賛
ろおろ〳〵我れ歌ろ〳〵世の憂さもろ〳〵病のうちもあれな
詼諧
世よ捨ろうそさうみしくれの笠やうう脚
宗祇法師紀氏の族にて姓は二善氏飯尾下総守貞国の子也
の門下にて連歌の宗匠となり世に宗匠と称す
より称名院と改む
王中関通勝入道也足軽へ降る
ゑられ宗祇法師より
頼朝義経初対顔地
蒲冠者範頼
来りて牡鹿の皮毛の敷物
東鑑云
治承四年十月九日武衛頼朝令遷宿黄瀬川
川給中畧今日弱冠一人御旅館之砌称可奉
鎌倉殿之處武衛自
啓移赴之義實等惟之不能執
奥州令聞此事給思之年齢之程
即無早可有御對面者仍實孚請彼人
而義経主也即參進御前互談往事催懐舊
之涙中畧此之主者法皇之後依継父
遂父喪之後孫之扶
持為出家之登山鞍馬二條大蔵卿長成之扶
家之後成人之時頻催會誓之
宗祇法師

思ひ手自加首服特秀
多年也而今傳聞武
衛被遂宿望之由欲進發
處秀衡強抑留之間
失悔情之術追而奉
千貫楯三浦の駅のあふあり伊豆の
青柳一千貫とよみて
駿河にて浮島ヶ原の小沢駿河
よりあへ阿比留楯あり
隔々うちて増鏡
所有て小流自在あり
和こんな上方うそうそうされと
ろふうて世よ名
駿豆両国堺則ち黄楯の下沢流
友切の國さうい
箱根駅まで三里廿八町代國都
入る所にて二六中仏接ぐ小
の旧跡と頼朝公の祀りおれ
伊豆三嶋神社三島駅中ふあり延喜式
内名神大月次新嘗
祭神大山祇命相殿四座神社記云天平五癸酉歳鎮座。和漢合運
云聖武帝御宇天平五年二月明神出現
日本紀曰伊弉諾尊抜劒斬軻遇突智激二段其一
段是為大山祇神一段是為雷神一段是為高龗

神代巻鈔云伊豆國賀茂郡三嶌神社攝津國嶌下郡三嶌
鴨神社伊豫州越智郡大山積神社此三所俱二神也

末社

見目洞 樓門の外の側にあり。八幡宮 同所にあり。巌嶌洞 二王門の外の側にあり 作中にあり
東五社 俱に本社の後東側にあり。舩寄社。飯神洞。酒神洞。多二洞。小梅洞
西五社 俱に本社の後西側にあり。聖神洞。天満宮。大梅洞
別宮八社 田川洞 祇園洞 舞臺 本社のおもてにあり。隨身門 社頭にあり 樓門の外にあり。三層塔 二王門の東にあり
鳥居 一所は樓門の外一所は海の側に有 共に石柱。二王門 樓門の外にあり。神馬廐 猪門の東にあり。藥師堂 本社の東の方にあり
神池 二王門のたもとにあり。鳥部屋 塔の側にあり。馬場 本社の東側にあり
寶藏。神供所 俱に本社の小にあり。
例祭 七十五度の内大祭正月元日中酉日八月十六日 十一月中酉日 神官矢田部氏社家三十六人

東鑑云 治承四年十月九一日頼朝秉燭之程令詣三

嶌社給御祈願已成就偏依明神冥助之由御信仰之餘黙當國内一奉寄神領給則於寶前令書御寄進狀給其詞云伊豆國御園河原谷長嶌可早奉寄敷地三嶌大明神祈禱安堵公文所寄進如件
右件鄉園者為御祈治承四年十月廿一日 前右兵衛佐源朝臣 朝臣
先行紀行

伊豆の國府ふりめれを三嶋の社も今なほきにしへの伊豆の國三島の大明神をうけ一まると聞き能因入道伊豫守實綱が命をうけて行くみくまりくる小炭旱乃天つ雨暴ふりてかれ草も稻葉も忽ふきふりくる行人くれ御祓ごりふれびなどとかけまくをかしく侍り

せきの井戸苗代ちのおれきてまこわすくさかそのの神 光行

按るに伊豆の國府いわゆる鈔小田方郡とあり三嶋神社に延喜式に賀茂郡四十六座の内大社とみえたり又鳥丸光廣卿東行の時霧雨して此社に駐ふ到り洪水して箱根へもどるもさやうもおくらふ深くて此社に御祓をたまはりたまひしと

三鴎
多居お

天の川井関の名伝せんとよみ今も三鴎の神形〻は神　光廣

かく詠したまひしかど神感ましまして雨止んで晴天となりしかば

支當社を攝州豫州三所共に三鴎と称して大山祇命伝承る形り

該ふりよ三鴎は大山祇冨士を本花開耶姫みく御親子の神と旦初雨の

神ふり神道ふを三鴎龍雷傳ふて神秘あるとやそれにも侔そ

旅因法師あふ祈りちふて忽ち完廣つ止雨の和哥伝なり分治承の昔ふ

三代の將軍九代の執權共に恭禮厚くして田園伝寄附せし宮柱

壯麗ふして社頭巍々ふり氏神の使令ふて神徳ふ鴛鴦水に戯れ神

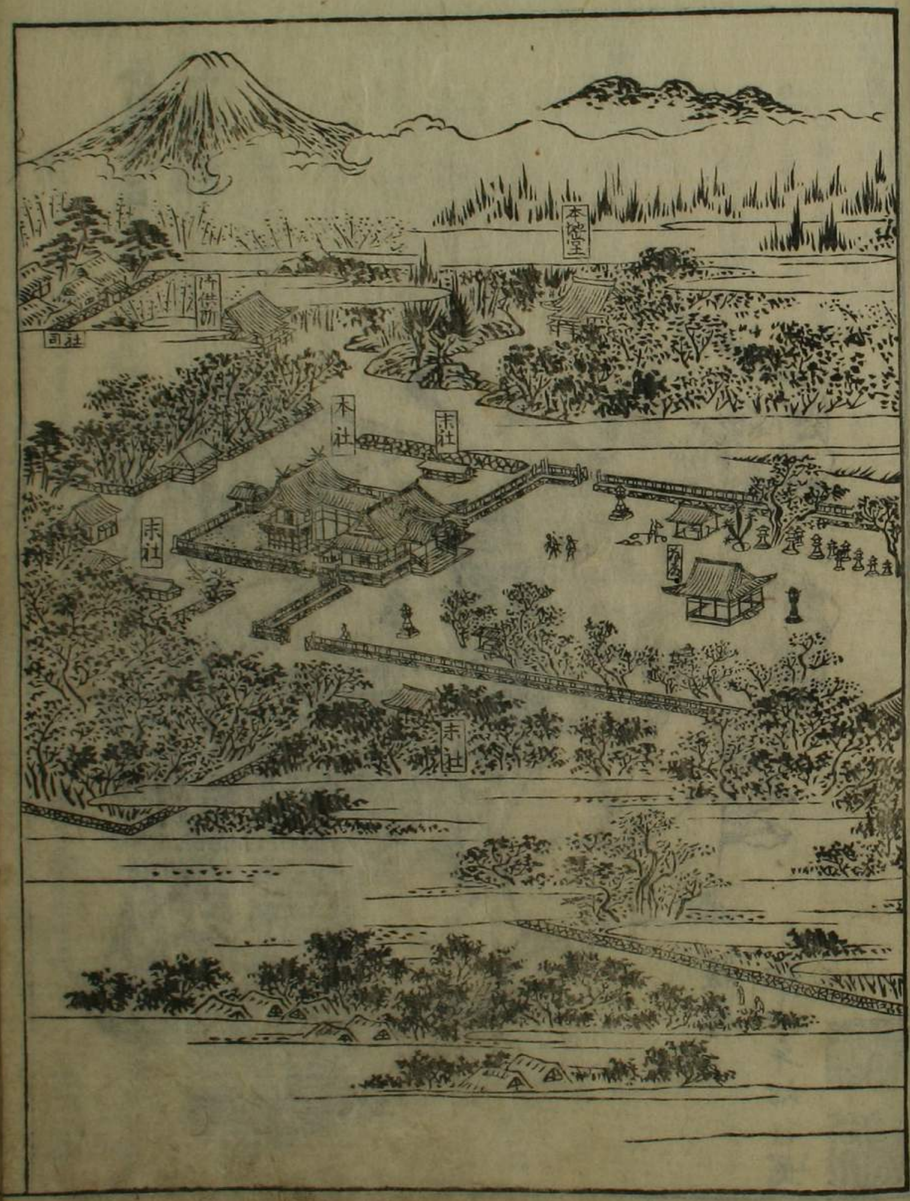
雛ふ鴎鶏ふ馴ふり驛の小川ふ鱒多く生ひて多伝拍ふふるふ

いよ〳〵ふり暦伝製て社家ふりおくられと三鴎暦とふ神風や豊みてその

あふふるもとふ報の著ふ瑞々ふる松の影ふ糸ふ交り玲の聲ふ虫の音ふ通ふ

ねてもふ演座ゆふり二千有餘家氏子れど神徳ふ日々ふ新みして

ゆきの貴賤まがふふ詣して老ふ伝の久ふふ伝初ふる礼と賞ま


本地堂
御供所
社司
本社
末社
末社
末社
末社

八幡
八幡社

正月六日
三嶋參

陸奥
陸山平起白寫

走湯山　三嶋より南六里許ふあり走湯權現山嶺ふあり伊豆御山と称ふ頼朝ヒ挙兵の時小嶋小松殿ふ命じて法華経書寫千部の願ひをあらしめ事東鑑ふ見るより事社壮麗ヒ石階を重ね甚ヒ厳重ふ鎮座ふ列書ふ如く若宮と称ふ

玉葉　伊豆の國山の南小川ふ湯のそそぎ入る湯のそれ神のおもふ

龍之湯　武町許山下ふ巌洞ふあり龍ハ二所ふ住ひて海山幸ふ深く其深き事を知らず故ふ走湯の名ふ負ふ

熱海温泉　走湯山の西乃方ふ当り湯の名あり此湯ふ入浴すれハ諸人ふ湯ふ勝れて熱きふより熱海ふ名ありふ

古々井杜　伊豆權現の西ふあり

拾遺　おくふかき古々井の杜ふ帰郭公なかてもとまるの森ふいそそ

頃

思ひ出ることの杜乃京ふをよそ時鳥人の袖もぬれそう

新範法師八幡の宮の本ふかりて任国ふ下りけるふ五月ふ内の大貴の三位ふもやふ行りける

續拾　五月雨ふ井の杜乃時鳥人ふ忘れぬ事こそ鳴渡るなり

郭公なくなる乃うの小暗ふ聲ふきくよ亦人の袖もぬるうう

左京兆光
入輔

左京兆房
大貴三位

興小嶋 伊豆の海濱にあり

新後撰 箱根路を我越くれば伊豆の海や沖の小嶋に波のよる見ゆ　鎌倉右府

冨士見平 三嶋より今井坂にいたり舩窪と云所あり是れ冬の日より鶯早く啼初る塚原臼井坂をこし市の山法華坂あり七面祠法華題目堂あり大時雨坂小時雨坂を過て三ツ谷村下長坂笹原村に宗閑寺と云梵刹ありこゝに一柳伊豆守の塚あり藪辻より加垂山下田への通道これあれども富士見の平にいたれば正面に冨士山三保の松原数千里見ゆる也

山中古城 かの見平の東山中村にあり小田原北條の時こゝに城を築く北條左衛門太夫氏勝間宮豊前守等に命してこれを守らしむ豊臣秀吉公小田原征伐の時関白秀次中村一氏等これを囲てこれを攻る一氏が麾下渡辺勘重綱先登して勇威を振ひ味方の一柳伊豆守討死す小田原方も間宮と初め大勢討死して氏勝敗走し遂に落城す今は城墟の町とよばれ左の方にあり

豆相両國堺 山中村を過て小枯木大枯木石荒坂こてより豆州葦山の堺見甲石坂に甲石二ツありこれより坂を過て國堺あり

風越臺 國堺の辺りの名也左右双木老枝多しこれより箱根駅まで十八町の釜石坂赤石坂を過て此坂の南の方に山神の祠あり箱根の宿の入口より芦川町より入て右に駒形権現祠あり越して此山路の左右に篠竹ありて自然と繁茂せうられを刈て京都へ出し煙管の羅宇となす節高く性堅くして佳也箱根竹とて名産なり

山路来て何やらゆかしすみれ草　はせを

相模 箱根

驛ハ箱根山の嶺にあり小田原まで四里八町駅中に関門あり月宮章白目関左の境所にして御関也又庚申堂鐘堂あり南叙の旅舍つらなり旁繁くして蚊蠅なし又曇天多くして雨気繁し小田の方より駒ヶ嶽東北に二子山南に日金山伊豆の海嶺に見ゆる

千枕 足柄の御坂につんで玉匣箱根の山のあきんかしをもち　柿本人丸

寂蓮集 十月はかり東の方にゆかりけるに箱根といふ山を越けるにあり
さねわやしく〱の常にかゝりく遥に深くかゝりては海と山と谷に
くらせいたきなむけはふに風に木の葉を誘ひくるあけて夫れの梢ちりのかくれハ
旅の空雲やむらくも越けるんまたかれ袖の下よりぞたる　寂蓮法師

過箱根山

客路辟郷垩峡旬　千山猶是獨行人
罩衫雲濕晴疑雨　老樹花開夏似春
仙鯉潭清無網罟　午雞村遠有朱陳
苹蹤未識何時定　仰望煙霄愧隠淪　六如菴

たゞ旅にもあらで関路のかすみかな　斑竹

耳酒ともく仏家や壺をみれ　豪菊

箱根の湖水

西の原地蔵堂

箱根宿

箱根驛

箱根
権現社

小地獄

泉すア

芦ノ湖水　一名芦の湖とも云　周廻八里餘　箱根の山嶺よりは長サ二里餘　幅其中ニ。九尾崎。石尾峠。二ヶ所。湾ヶ浦等の湾あり

湖水ハ絶て赤く綿魚ハ山中の渓川に生ス小児五疳の妙薬とす

末未　むくげそこねの山乃峯おくれ居て月を待ツ　　曼融

考ル紀リ

秋なるか水も皆げら形ろ山の中ふもとの湖水と海のみるくなれるとそ

乃湖水と海のみるくなれるとそ神ふまつ　　光行

うつし来楼宗殿乃雲ふかき形ハ権現垂跡のそこひけるくたれ巌窟石龕の浪ふのぞめるが　唐家の驟山宮をおもひ

たより形ハ浮身のゆく情まそ　錢塘の水心寺ともいひ仕ツ端き

るにそ

今よりをおひこそれしめ乃海のみるくなれ神ふまつそ　　光行

うつし来

月もまゆしく山を動くれ二の形　　蘭更

ゆるされ咲名箱根の女郎花　　蘇雨

箱根山と称る目みそこの友小中を次

ワさとなかやハ雲助かやく資次　　蕪村

箱根山金剛王院東福寺　箱根山ふもとあり古義真言宗　箱根駅より新屋町筋原

堺迄ふ壇墓多くたふ尉が鴉あり　　箱根現垂跡より元箱根ふ到る山かうこふ地蔵堂等

箱根権現社　縁神中央表火々出現ありと　例条六月十三日

社号ハ箱根神　能野権現ハ善祠大師堂　本社のかたわらあり　役行者形安ん　側ふ

未社　駒形神　高野祠　弘法大師ふ妻ふ　孫院観音形安ん

獅子巌　行者堂の御供所　石ふんの側ふあり　薬師堂　石階の下那堂の門内ふあり

親鸞聖人堂　権現社僧ふ命て日明朝門ふと　貴僧来住あり　此の夜

神宮ふ参籠て待所ふ　聖人東国往回の時代所と通ふ其ふの夜

霊夢ふより我ふ教導石ふりふあり　由縁詳ふ記せり　本堂頭寺傳記ふ

道の傍ふある我ふ教導石ふりふあり　由縁詳ふ記せり　曽我兄弟の

の時仮と称く形ふく其ふ半王祠山王の祠六躰地蔵堂等　湖畔の丁ふ

寺記ふ　　そ　当山の初ハ聖古仙人幽居の地ふて神威と崇ら寿齢九百餘歳ふ

保しとや孝安帝の御宇ふ湖水の中ふ日代出現ふ建て相宝殿三面の堂と

し欽明帝の御時ふ韓国の高根権現ふ勧請ふ山の形状幽ふ仰ぐ

とし箱根山と号け湖中の堅石に経一宇を建く霧門
品を誦し今湖中の堂嶋これ歟石役小角も登山し行基大士も
昇臨して東福寺と号し一山岳林泉に名墳多くして都率の内院に
表して四十九所の名に負ふ天平勝寶年中に隣巻上人鹿鳴明神
の神勅に依り湯に止る当山に練行する事三ヶ年に社檀現に
崇て上人に依中祖と仰ぐ諸経の読誦一万巻に及ぶ又湖水の内に九頭の大龍有て時々風波を起し民に
隣巻上人と呼ぶ又湖水の内に九頭の大龍有て時々風波を起し民に
悩ます上人の深く憐に臨て神呪一巻を誦し給へば大龍水上に現じ即鉄鎖の呪縛
をゆるし大樹の下に繋れ永当山の守護神と祈り奉る(樹に栴檀香木と)
今の箱根湖中之弘仁七年に万巻上人勅に奉て上洛し帰路に到て三品楊
那那に於て入寂に従者遺骨を当山の守護神と祈り奉る(樹に栴檀香木と)
田方那に一寺に建てをかれ納む是に依て箱根山新光寺と号し又の名に
小箱根山とも号し其後菩薩天皇より後堀河帝まで七代の帝王尊敬有

て神社仏閣巍然たり弘法大師も慈覚大師も登山し給ひ小止観一花山院の皇
子豊尊法親王当山の座主職に任ぜられ金剛王院の勅額あり
法親王の御守護当山の別当に勅し行賞倍正にして別当と称
武門に田村将軍。源頼義。右大将頼朝。小條時政。義時。泰時。みか尊
恭く曽我兄弟孝孤に討入徽塵丸薄緑のを乃至後小頼朝つよう当山
小宝の内にて什寶と称する其外寶器多く時に星移て小田原陣の時兵
燹に罹つしかの十が一ほも及ず東田碧石海須更に尽るの謂歟

当山 名所四十九所
宮法山 茶師ヶ嶽 桃戚山 箱ヶ崎 不動石 御庫石 浦嶋桜 相模津 伊豆津 沈
駒ヶ嶽 墨ヶ嶽 孔出山 諸仏川 馬乗石 踏跡石 目代本 湯坂ヶ嶽 駿河津 血の池 峰ヶ沈
冠ヶ嶽 高風嶽 桃灯山 馬洗川 馬洗石 鶴ヶ嶽 杉木 織悔津 祐津の沈 阿字沈
嵩山 仏供山 三途川 五条石 伽羅木 於矢倉津 花川津 進沈
明神嶽 文殊山 経ヶ嶽 吾妻川 遍照石 於矢倉津 白川津 沈
寶蔵嶽 二ノ山 仏供山 三途川 五条石 伽羅木 於矢倉津 花川津 進沈

東鑑曰
奉寄
相模ノ國早河本庄
為箕根別當沙汰ノ所
右件ノ荒ニ御庄ニ者前兵衛佐源頼朝為ニ沙汰ノ所
寄進ニ也全ク以テ不レ可レ有ニ其妨ヲ仍テ為ニ後日ノ沙汰ノ註文
承四年十月十六日

同書曰
安貞二年十月箕根山ノ神社檀佛閣焼亡ス當社
垂跡満月上人草創以後五百餘歳赤ヲ有ニ田禄
之例ニ北條武蔵守泰時頻ニ歎息ノ潜ニ有ニ解謝之義
彼ノ奉ニ願書ヲ仍テ造營ス十二月二十八日遷宮ス

神社考曰
伊豆箱根ハ者。本社彦火火出見ノ尊也。又有ニ駒形
權現。白和龍王。右鵲王。左鵲王及ニ客人ノ宮ニ權現又
有ニ役ノ行者。吉備ノ大臣。弘法。慈覺等ノ遺跡ニ

箱根温泉
七箇所ありて七湯巡ると云ふ。箱根權現坂
にて御道小標石あり。
○生死池 標石より六町あり。
○葬の池 件池の後小阪有比丘尼の元西阿原石地蔵
又堂あり
長さ丈余弘法大師
彫りつけ給ふとなり。多田滿仲石塔。十二光佛石像 共ニ地藏ニ
ありて

○曽我兄弟石塔。虎御前石塔。庚申塚 共ニ叢の中にあり土人云ふ又虎ノ
石塔ハ行ク事ふた一町あまりの所へ移すと云

△芦之湯 七湯の其一箇之權現坂にて入湯に気味悪く
功能ハ癩病 黴病 一切の悪病 湯屋の封面例ホモ町許入湯の客舎ありて
○小地獄 芦の湯より八町許ありて
硫黄と称ふる 横臭 鼻を衝ふ 僅の地獄にて
小さき地気を昇る所あり 又大地獄とよぶ
里語ふるれば又大地獄とよぶ

△氣賀湯 芦の湯より五町許ありて
中ホ岩湯上湯平の湯
鹹して胸悪の香あり
野風 瘋乳 疝治ス

△底倉湯 氣賀より半里中むら地震ありて石崩れ路絶て今絶ゆ
四湯二三ケ所あり
温泉の出ル所より通ず

△宮下湯 底倉湯より弐町許
温泉の出ル所より通ず
頭痛 疥癬 腰の痛 疝治ス

△堂嶋湯 宮の下より五町許
堂嶋湯 疝治ス

△塔之澤湯 堂の嶋より三湯の中にて地獄廣くして
風景第一の勝地と山川聚落と号ス川を早川と云

あり湯沢の湯坂にそえて見わたせは吉原木流る早川の水　以仲

按ずるに玉緒嶺とらへ水戸黄門光圀卿明人舜水と共に遊び道遙しあひ此嶺に名づけて浴餘嶺とて廣く書院抔ある座敷中何れも使景之江府より諸侯時々ここに湯治しぬる也湯は秋山弥五兵衛一之湯或は小川氏大和門内湯ハ田村久兵衛萬屋喜八兵衛治小兵衛等なり都て家数は三軒あり此温泉ハ氣味軽くして養生湯なり諸病ともに治れ

△湯本湯　塔ノ沢よりここまで十町あり町の中に浴屋ありて四間ほど仕切る内湯も二三ケ所あり種々の瘡毒癪癇の類によし是より三枚橋へ五町許あり姫と歩て橋の東へありこれより箱根道東海道へ

箱根山温泉記

相模國足柄下郡箱根温泉ハ白山妙理權現主宰し給へる所なれバ其神力ばくハへ諸病悉除のこととほ思ひし此湯に入給へる人息災延命の樂保これとなる事なし此湯本ハ小田原の西十里はかりの所山縦へ水清く萬代も動きなれ岩根ありしれ千世も兼久ぬれなむ立つる藥に放光堂あり運慶法師作れる地藏并ニ姿童も無佛世界度衆生の誓たててくありし東に三峡橋とりて岸のかたへの小原岸あり富士岩様ならぬ其上

よの時しらぬ雪の不二のたぐひぞかかるともいえぬかぞけなる形にし小た嶺にて堺あぐりて其岸に湧ぬる湯谷なれば東景目を悦ばし先心湯ぬぐふむる事なく溪をに養性の所にしかも妙理権現ハ天地ひらけしはじめて女神かうみ給ふなれ初め中のいざなみの尊にておわしまして本地十一面観世音にてなまはれにましまし給ふの都元正天皇の養老年中に泰澄大徳越路の白山に詣て仍りし小権現示しめし給ふ我は信ぜぬものを願ひとかなへり衆生のわざはひを除かん我なれば見まほしく宜ひて九頭のおろち小現じ給ひしかば泰澄して十一面観世音菩薩妙相端厳にして拜まれ在せ給ひぬ泰澄感涙ばかり抵て時いとう懃懇にして今かくいふ下にこの見ぬ世に承て是までもわすれずまもりぬ願ハ像法末法の衆生小大悲は有くわぬ神くわくひ悲しませ申さしむる也其湯井金冠ば動かされさう引出しへおのれ霊驗いちじるしと聖武帝の天平八年に泡瘡のえやみ有て上中下此まどひにかかりけより泰澄に勅して十一面観音の法ばを修せしむ之ほどへて五歳の内ハ流に其まさりひとまぬがるて

箱根七温泉の中ゟ
塔澤ゟ強ゟ水の
冷泉へ風流ある
座とゝのひ内湯
ゟく温泉ゟ冷泉ゟ
ゟく龍湯ふ
し肩膝腰
など病ある前と
うゟく入ゟる
湯槽ゟ浴して
益衰流ゟく少
湧ゟ半泉の処
其間そゝ赤水の
湯弓軍書漢の
席ゟく勲ゟ成
僕そも
みふ
書生の

五ノ五十一

一つゝみ

鬼のかい地獄ゟく

箱根の湯

やまひ
かるれ
極楽とある

箱根名品挽物細工

御通湯本村
酒茶ハ勿論の外人形の細工品も〳〵おもしろく〳〵て色々彩り塗
箱ハ百ハ百品も〳〵おもしろく〳〵湯本ハ勿論の外人形の細工品も〳〵おもしろく〳〵て色々彩り塗
又ハ裁ハ硯〳〵の枝た石〳〵八九個も
。権現坂より通ハ堺ハ見坂 老ケ坂
猿摩 根獲坂 畑峯屋 辻所の茶店
山ハ女ハらぐ〳〵ハらふ大石あり
の龍 姥ハ坂 葛原坂 坂上ハ坂より
あり 親ハ坂 新通坂 地蔵堂ハ
南ハ新宮 権現小ふ

函関七
関一門百一里倚二巌嶂一十二ノ東一秦車一轍通ス　縣次公
天一色幾一餘黄一霧ノ外人一家半一住白一雲ノ中
湖一分銀一漢星一衣湛二峯並一芙蓉一氷一雪同レ
一自二終軍一棄レ繻ヲ入二干レ今士一氣此ノ間雄ス　蕪村

撰ハ本ハ〳〵ハ
政の巌刺ありといふ〳〵
時代の表ハ
限〳〵ハ手ハる事さ

箱根の挽ハ店を
〳〵ハ玉ハ箱根の
〳〵のハさおさの
ハの東ハ地徳ハ
関門　九狸

梅の花

眞一

金陽山早雲寺　勘平村にあり　禅宗　家　金陽山の額同筆
佛殿釋迦佛　開山正宗大慶禅師　伊勢新九郎長氏永正十六年建立
北條五代墳　寺内にあり　宗祇法師墓　境内にあり又傍に
北條新九郎長氏法名早雲伊勢平氏の末裔にて相州小田原の城主となる法号を宗瑞と称す　九十餘にて卒す
次に氏康まで五代の間関八州に領す　皆此寺に葬る　墓石小壊
覽箱根貝葉作
諸聖悲羣彙　搜扶免生源　有身諸患本
七趣爲焚園　受身何所緣　靈識是其根
識質相纏繞　萬苦不堪論　飄揚同野馬
騰躍似囚猿　不驚三有夢　何酬諸佛恩
縱聚河沙福　欺魄耦迷魂　雖說精眞道
無殊酡醉言　琅函如五陵　須知要領存

食息警遺忽潛思歸至尊
江陵　萬菴著

早雲　箱根三枚橋とうち橋の下流くだりて早川風小坪谷入る
の方より流る此山河もえて中ふえ迄はゆしき大事くとうち又承久の乱に甲冑
嚼石橋とうち別小陣河くだり早川風とて水
系箱中將範頼小余朝時
中ぐ流めぐりくて成ゆいぬ又元引の乱にも義盛の成輔朝臣此山おそ
新一本をほ記

長興山浄泰寺　入宇田小あり又入生田とも書けり
佛殿阿弥陀佛　小田原石出る　禅宗　戴蘖派
恵ざ僧都の作　座像立尺許開山鉄牛和尚令領八稲乗
重之門内より石階八十三百級之迄ふ
見るべきは之鴻臚倉　経ふみ
豊太閤御陣所　入宇田の東風余村の南石垣山之天正中小田原攻の時豊臣秀吉公の陣屋
東鑑文書　治承四年八月廿日房総頼朝公大庭三郎景親
石橋山　小田原の今より三里許南ふあり海面遠々こ遥て見ゆ
三千餘騎以る辛々て競迫駆る武衛ふ小退れ

間小加名次景廉大見玄次實政武衛の御後小少く景親武衛ぐ
北條時政い君臣義をもんして數町の險阻いをも厭朝ついの節ふの
中小退れく實平時政等其後小供ぐる武收めく實平ぐ各無るの
泰こられで喜びあうとうぐも人数武率せしめるいふ小陣ん各々事
叶の雅一御一身小於て、縦旬月武歩ゆいで實平計畧武加慮一
なるべとり北条四郎い箱根湯坂と悪く甲州小赴んとん小条三郎い
土肥山より条原小降る大庭景親等武衛の跡を逐ふく山谷武捜求る事
急ぐ時小梶原平三景時しら人者あり
情の慮武有ぐ中小入跡形とうて景親ら武曳像の姿小摸
る武間小武衛御髪の観るの像武出しとる巌窟小安しまう實
平其意武回なる作小云貢武景親等の日ふ本尊ふ仏添氏の
大将軍の前ふ小ふ房のよう人定て誅と賜ふ仆のそ像い我三歳のむ一
乳母佐ふ北条小奈竜七ふ嬰児の将来武祈る事懇篤ふて二七箇日武暦て

霊夢武蒙り忽然うて二寸の銀乃正観ら像武感得し帰敬なる人者ふ依
ら小条殿掃山の陣小条着一首根山の別當行實駄餉武持一めて
武衛武謁なる小隙及咲て将の御前小伯むの時直已小千金ふ
餓小伯むの時直已小千金ふ

小田原模

大儀まで四里小田原北条氏綱の時京都西洞院錦小住外良ら人者ふ依
下り家方遠頂春武製一て氏個へ献ん其由緒い孫倉建長年の開山
大覚禅師未朝の時供奉一日宇へ送り家方と弘む氏綱
られを霊茶一小田原小八ツ模の酒宅武賜り名物一て世小聞ら
小田原北條 豆相記ふ小条幼九郎長氏ふ
酸て原源八郎ふ称ら氏綱ふ勢謙男武世小蓋ふ奮然うて俗中國よ
小至つて関左の動乱武憤ん関八州武併呑ん小志ふ仕く今川義元小仕
居一早雲と号ら武威いよく懐んのて雄偉豆相小振ふ其の三代氏康
富嶽ふ定め軍将を八方小遣て雲霞のめく九圍む小条も東八ヶ國の軍
勢う云ふ余小大軍武催一出陣一石垣山屋形を
築て十万ばら八て防戦の術急一ん武死れる秀吉公の下ふて諸軍後
詰石垣武ふり築小及ひ日氏直高野山小登れて小田原小条ふ五代
九拾七年
ふ滅ぶ

小田原外郎透頂香ハ
文覚禅師京都の時
日本小伝を小条氏綱
あつふ在城の時
八棟造の茅店
仮許〳〵く
弘ムさせまじ

三絃の
トウチン唐の
真ねる
千里ふ離ゆ
虎屋外郎

うらう

透頂香

春暁

酒匂川 小田原の北にあり酒匂八相模川の異訓なり又一名鮎走川ともいふ小田原と
酒匂の中ホ山王郭ともいふ星陵郷井上の宮あり三浦荒次郎の霊祠をまつる云
盛衰記云 治承四年八月廿五日和田小太郎義盛三百餘騎にて鎌倉より稲村
腰越八松原大磯小磯を打過て三日路次一日小酒匂の宿に着と云云
同記云 相模國国府川を渉つゝ一時腰越原ゞ稲原小水とうち跳り奉り
一時腰越原ゞ稲原とうめく

ほりの川もゞ汲ませ給へ人もかう御ー 三浦
小餘綾磯 酒匂より大磯までの磯辺にて方角抔見え大磯小磯乃
古今 おれのこゝろやらんとうち詠きのいその波分仲哀あり 飯行朝臣
旧大系所 古今集の磯と詠ー砂葉揚ゆゝ波
後撰 袖ぬれて貴人の御供つかまつりや人もかう御ー 三浦
旧 古今集の小磯の後乃まつ風やらうえん 右近
旧 いまゝで小日日をまつきまれ後ぬらそや今ならうえん 小貫命婦
拾遺 いまゝでをゝくをゝくこゝろこのいそにまてもかひ好ゝり
續千 陸奥の小磯も松のいそゝゝ南 小野小町

ゝこほゝ小又このもひもまゝれのいそ 依子内親王
夫木 鶴ますむ松も老ゝこよ絶きの後の蘩さゝや世代そ祈れ 紙宣
旧 ちゝの我の磯乃松風吾まれ今夕波ちゝうえさゝく 土御門内含
小系武康

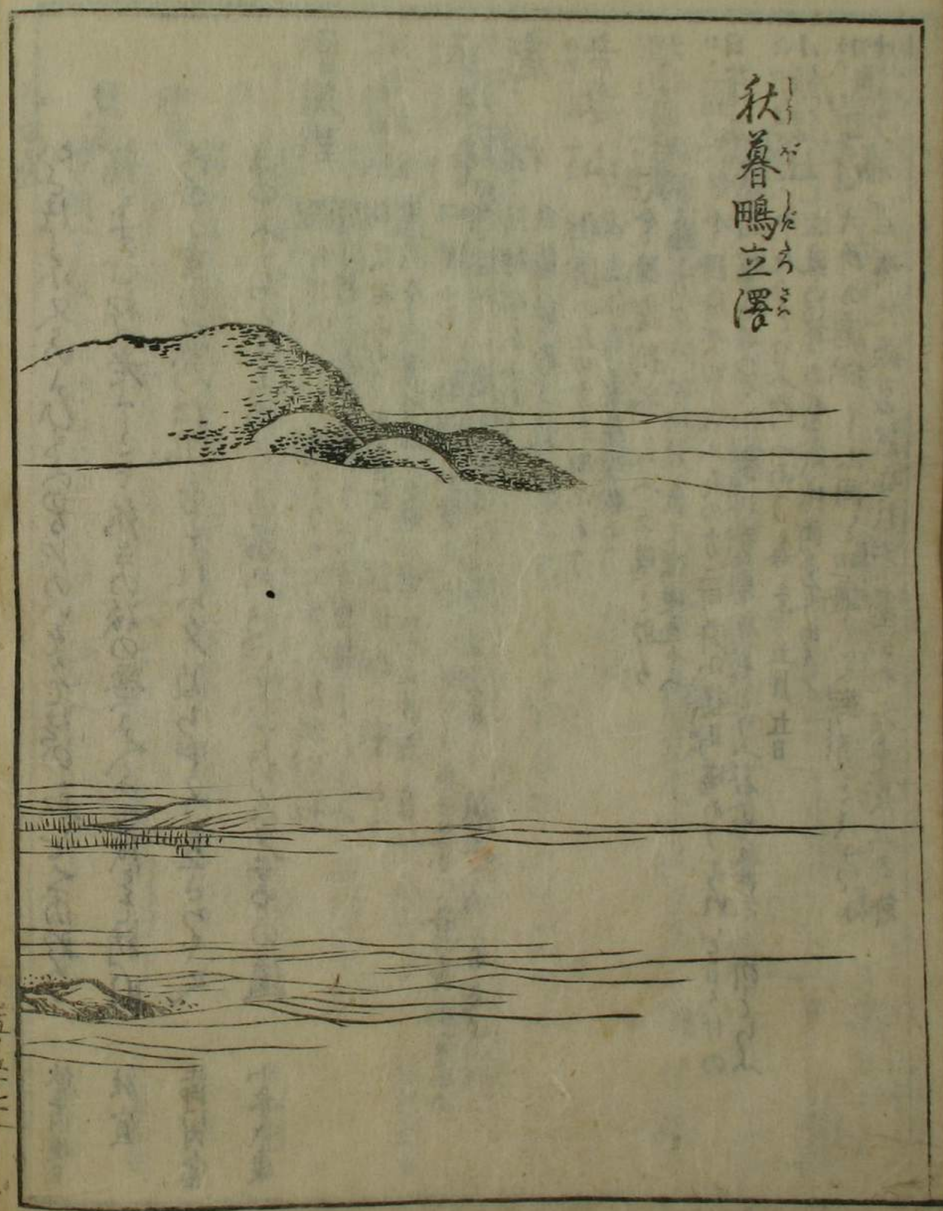
曽我里 酒匂川のほ小八幡より廿町許入る我兄弟
旧 村ふあり梅澤山東光寺と号ー真言宗ゝ堂おゝ古木の
宗廟のり儀の箱求小夏ゝ年多ー 故ふこの名あり

藤巻寺 旧

鹿松 旧村松原ふあり
由縁詳ならず

吾妻山 御道のたの方武町ふあり
山上小吾妻権現洞あり

相模國府蹟 今國府新宮ゝら小ゝ場と称ふ
たの方小六社の神蔵王権現を
日蔭馬場 今国府次切ゝらゝたの方二町許
馬場とおゝく小梨判官兄弟
小餘綾杜 中ゝうゝら小所ふあり毎年五月五日
六社の神の祭式此所にて
此通地蔵 此所の道狭ゝ山間を切通ゝて御道とぶ
石佛地蔵ふ波安八行基の作ゝそ長五尺許



秋暮鴫立澤

さびしさは小又のみやまもとなる
夫木 鶴もまむ杉も老さることよ秋の蚤さくみ世絶そ祈れ
同 ちはや愛の礒乃松風吾されゆ夕波ちはやふるさくく

きのふさらくまのゆきの礒乃波いそいそいてりん夕多多の道

曽我里 [附]句川のまた小八幡より北町許入る曽我兄弟
[附]所々山中みてる曽我の中村とりみ

川句神社 [附]村おあり延喜式小餘綾那一座也
書入今二宮明神と称ふ例祭五月五日

藤巻寺 [附]村おあり梅澤山東光寺と号ふ真言宗之堂おふたの
[附]澤山東光寺と号ふ真言宗之堂おふたの
諸木小蔓生多ふ名あり

鹿松 [附]村江糸ふあり
由縁詳ならず

吾妻山 御道のたの方武町小あり
山上小吾妻権現祠あり

相模國府蹟 今國府の新宮ふらんたの方小六社明神
たの方小六社明神

日蔭馬場 今國府吹切ふらんたの方二町許小桜馬場あり
馬場と称ふく小桜馬場あり

小餘綾杜 中ふうとふ山所ふあり祭判官思庵毛とふ名馬伝説ふ
六社明神祭式ふ毎年五月五日
式武所ふてあり

切通地蔵 [附]山間と切通して御道とふ
石佛地蔵ふ行基の作ふと伝ふ

依主内親王
紙宣
土御門院
小条氏康

秋暮鴨立澤

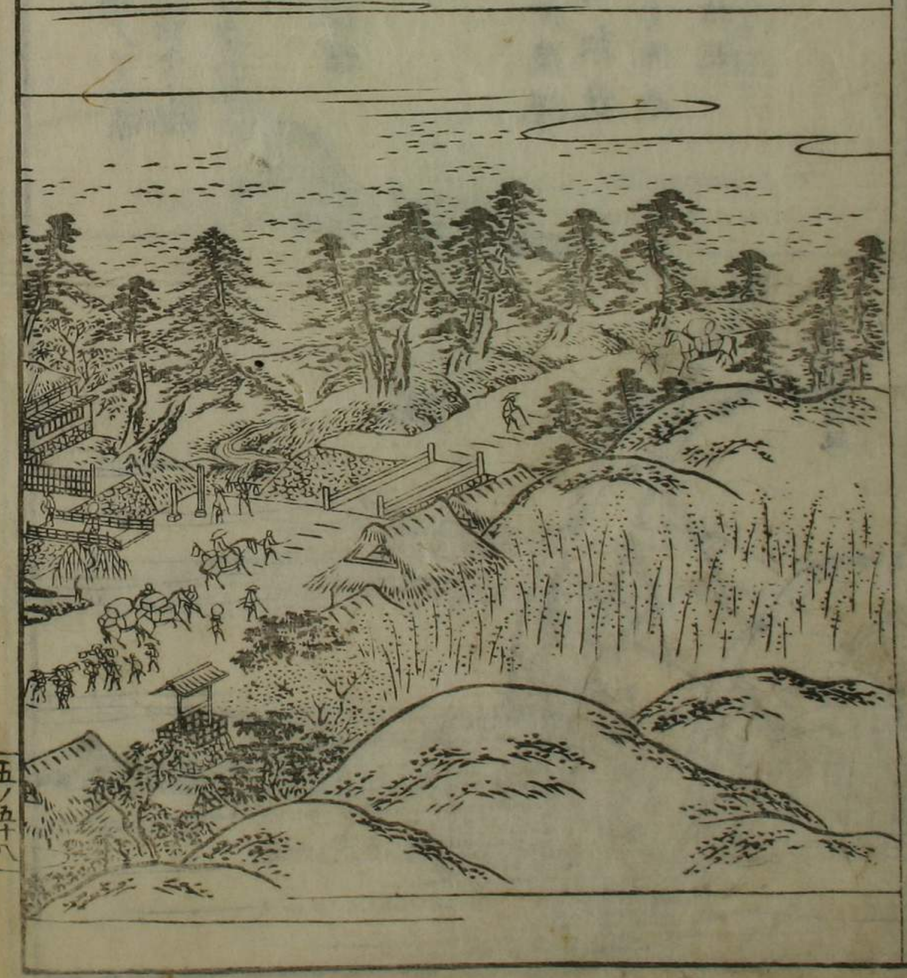
大澤秋慳夕景涼
雲去湾抛兎合鶩
左相著生業有
歸紀津
古川古松軒

山僧停杖地陂澤
水如烟鷸鴈秋
天晩悲風全渺然
畑維龍

石田友汀画

暗立澤

暗立菴



暗立て

あやまちをかむ

碑も

多の流とぞ

あれにけるかな

鴫立澤　しぎたつさはの物淋しき小野の辺をうちすぎて行脚の時代かうの涙をそゝぐ人ふかし

新古今小侯れ三夕の名句の其一首

こゝろなき身にもあはれは知られけり鴫立沢の秋の夕暮

此句略之ほとりの人訪とふらふ名所なき儀小磯の海辺と称するより井蛙おそれ俊成卿千載集に撰入時ならぬ山里て上佶〻る迫て登蓮法師手折伏柴の方ふかう分入袖の雫迄思ひやられもの

秋風の吹うら枯の森の奥

此句略之ほとりの人訪とふらふ名所なき儀小磯の海辺と称するより井蛙おそれ俊成卿千載集に撰入時ならぬ山里て上佶〻る迫て登蓮法師手折伏柴の方ふかう分入袖の雫迄思ひやられもの

寒さ身にしむ山陰の小家かな

此句略之ほとりの人訪とふらふ名所なき儀小磯の海辺と称するより井蛙おそれ俊成卿千載集に撰入時ならぬ山里て上佶〻る迫て登蓮法師手折伏柴の方ふかう分入袖の雫迄思ひやられもの

鳥羽殿へ参籠こもりて有明の月を見侍て

寒菊や粉糠のあとの濡仏

此句略之ほとりの人訪とふらふ名所なき儀小磯の海辺と称するより井蛙おそれ俊成卿千載集に撰入時ならぬ山里て上佶〻る迫て登蓮法師手折伏柴の方ふかう分入袖の雫迄思ひやられもの

旅寝して見しや浦わの浜庇

此句略之ほとりの人訪とふらふ名所なき儀小磯の海辺と称するより井蛙おそれ俊成卿千載集に撰入時ならぬ山里て上佶〻る迫て登蓮法師手折伏柴の方ふかう分入袖の雫迄思ひやられもの

○鴫立澤

草堂小安に十五丈の像大磯の虎と共に後人作りてあふとく〻側小東嶋の文石并てを作る三千風ら勧志に此地に詠きし時三千風と共に載る

鎗日

分にも過ぬ名とはのがれん
西方名此門いての風ふるむ匿あらろき此
あらくなれや利休所
秋やぬる松や笠にうつりて
なと俗うきの
宗雪居士の
あかい又
五百年忌の
友情人
道うくもの
あへり

元禄十三庚辰二月望日

東往居士三千風誌之

○虎御前像

○鴫立碑

秋乃夕からおりて
いみぢくうたふ
身の初冠
名ところ
わしも春の
嵐のよう
こちらうて
なく所
田鳥集小
たむけまて
施入成形て
立ーしを

平塚まで九十七町此辺より盆山石なる茶店に出してあれど買人家多し

相模大礒

虎子石 駅中延臺寺にあり当寺に此石の縁起あれども詳ならず

十郎慷慨愛於兎血気武人扉甲ノ軀
妾婦当時誓呈否隕成此石似望夫 羅山子

三社権現 高麗寺村にあり宮寺は鶏足山高麗寺といふ同寺は天台宗例祭六月十八日此所の生土神といへり

祭神忍穂耳尊 社伝云むかし神功皇后三韓退治の御時高麗より此所に来る神霊を安定有て神霊三所に止りたまふ仁徳帝の御宇に帰朝ましまして三国を渡せるの神なれば三社権現と崇めまつられ又伊豆御山へ神幸ゆかくなる時大磯の浜間に光あり伊豆山の松葉仙人これと見て大磯に来り光の本をさぐりて円形三尺の面の神鏡を得たり其後霊瑞ありしかば伊豆御山にうつし松葉仙人は日金山に庵を結びてよりたる高麗寺と号し麿ヶ原の名もありといふ麿ヶ原は鎌倉之次下に見えたり

花水橋 高麗寺村にあり此辺より富士よく見ゆ風景よし

駅馬進蹄行一路 野絆浮鼻入前橋
遨遊眼豁海山景 飛画人過花水橋 山崎闇斎

相模平塚

八幡宮 藤沢まで三里半 八幡村にあり別当は鶴峯山等覚院といふ例祭五月五日社内より大山不動尊への道あり

馬入川 馬入村にあり是は相模川といひ水源は甲州猿橋より流る此辺の大河なり又俗伝に建久九年十二月稲毛三郎重成亡妻の追善の為に相模川に橋を掛て供養を催しける時頼朝公の御参詣ありし重成が妻は北条時政が娘にて頼朝公の御台所政子の

妹なりければ右大将供養の為に渡御ありし帰路に向ひ帰らせたまふとて八的原にかかる所にて義経行家らが怨霊は現じ又稲村崎にて安徳天皇の御霊現はれ給ひしかば是に御驚きありて落馬し給ひ供奉の人々扶け奉り御所へ輿せて御帰館ありて遂に御病悩となり医療術を尽くせども更に其効なし其年も暮て明る正治元年正月十三日終に逝去し給ふ御歳五十三とぞ聞へし征夷大将軍正二位前大納言に任官し給ひまで凡て世は治まり権を乗る事二十年なり御菩提は所々の政子は悲歎に耐ずして髪を剃りて尼となり菩提を弔ひあるひ一説にいふ此橋供養の砌水上に怨霊出て黒雲舞下り雷電霹靂して其時頼朝公の乗馬驚きて落馬し給ふ馬は水中に飛入て忽ち死をとげ故に馬入川とよぶ俗説ありまことその実録は見ざれば隠にあるれ未だ詳ならず

吾妻記云

相模入道高時の嫡子相模太郎邦時は五大院右衛門宗繁が妹の腹に出来たる子なれば甥と主と二代の恩あればたのもしく深く憑れ頼し置たるが野心は挟んで隠しおきし源氏の侍に討せて勲功を得んと思ひ船田入道に語ら相模太郎の落行たる道を遮て待ける相模太郎は入道に相待体の所見せよと正慶二年五月廿八日の曙に浅ましげなる窶し姿にて相模川を渡らんとせし守は待居たる岸の上に立たる五大院右衛門宗繁

大山寺
一鳥居

てあれもやそこへ仲の人々と教それハ舩田ら郎等三騎馬より飛てゝ透間好く
生捕る俄の事小て張興覚もなくそれハ馬小乗せ舟の縄ふてもゝ〳〵かゝれし我
誠ら中間弐人小馬の尻うせて白書小瀬倉へ入れる是我聞人毎小油を
絞よぬ時ろ多き人未幼稚の身ろれハ何程の事ら有へくもなけれ朝敵の長
ふあれば尚ゝさ小非そ則翌日の晩暗小首ハ刎ら昔程嬰が我ら我ハ報
して幼稚の主の命小換豫譲ら貌と変ゞ奮君の恩我報せ其まそこを
ゆる五大院ゞ心の程希有也不遁こと又多人毎小弾そゝて悪ゝ名義員
實りとゝひれも誅さべゝと内々其義定つゝ兵家傳聞てちかゝこ
小隠れ多るゞ名来悪の罪身と責多ゝ三界廣ゝといゝも一身我措ふ
處ろ故蒼多一生いゝも一飯と與ふる人無ゝて遂小乞食のゝく
小成果て道路の涯みて飢死ゝるこを聞十
十間坂 馬入の東を里許小あり古所たゝ衙士大夫ら細根右ふ江ら鎌倉六浦金沢
那ら見ゆる也ゝ十景ら数もり人建武のくゞ元相模次郎時行三万騎の勢そ
鎌倉河發向ゝ此所ら於て十七ら度戦ひ三百騎ふ討ゝれ鎌倉の
大御堂ら於て討死ゝる事ら記ふ見ゝくゝり

大山寺

雨降山大山寺　相州大住郡大山の巓ぶあり、興許宗徳臨濟別者八大院其分廿舎十八坊時百五十餘宇又養毛村小十五宇ある俗曰上方京師より終南の者四小田急より左へ曲つて山蔭六里半之江ノ島より一里小一鳥居あり、此所より右へ曲つて山蔭六里ばかりそこ小一鳥居あり、此所より右へ曲つて山蔭

前不動堂　此村きそ五里ばかりそこ小一鳥居あり、此所より右へ曲つて山蔭

諸祈つて此所の家旅舎茶店あるそ名物の挽お店ぎり一枚路ふる

石段あり、此所より右へ曲つて山蔭

十八町男坂女坂の二路の嶮路あり、女坂一万四千餘丁の嶮路あり、男坂八百餘丁の嶮路あり、男坂女坂の二路の嶮路あり、男坂女坂の二路の嶮路あり

奥不動堂　本堂に祈八尊不動明王ハ僧正隆弁の作座像長九尺八寸南面

行者堂　本堂のあり役行者ハ鎮守　本堂のあり天照大神ハ八王子ハ熊野

白山祠　本堂より三町許小ふあり伊弉諾権現祠あり

鐘楼　本堂のあり大撞那従一位左右原朝臣家光と鑄ル

山門　本堂のあり二王門の傍あり仁王ハ運慶の作

二重瀧　本堂より二町許小ふあり伊弉諾権現祠あり

良辨瀧　坂路福永町より傍ふ

愛宕権現祠あり

新瀧　一の鳥居より上方

大飛泉　一の鳥居より上方

○石尊大権現社　常ふ諸人の参詣絶ず、本堂奥ふ動より嶮路九八町あり女人結界之勿論

[卅六ウ十三]

まで終道祇祀れり、仁戸及ひ迎町迎郷者参る津鞍

道中第大小路人家ある中ノ上と門登山ふ

祭神大山祇命　神祇官蔵石ふ記して傳云昔孝尊東夷征伐の御時

聖人相州小七ヶ年逗留の間ふ石ふ腰掛給て憩ひる人石ふりしと云ふ今ふ鷲

飛翔光姫表の十字ふ渇邪ふ小ふ七ヶ所ふ石ふ記して其上ふ遺文當山小傳表

書ふひ一遺文當山小傳表

未社　徳一権現祠大天狗

小天狗祠石像の宮の傍ふあり

寺記ふ

夫當嶽大山寺の開基良辨僧正ハ俗性ハ相模国藤倉深屋左郎時忠の子

也興之和名抄圖會小ふ仁国志賀郡の人とあり當山の説と

は傳記大略出ヤリ

ふ時忠ハ聖武帝の御宇神龜年中関八州總追補使ふて東夷征ふ

治ふ其祖先ハ大織冠鎌子大臣の玄孫ふて藤倉小在住ふ家富榮て

一門軒をならべて盛ふくらべども家と継ふきるあり時

時忠妻小苦うて我家倍繁栄たりといへども今ハ家智とをき一る

も擾ふ是非一の悲ふ且ハ女の身ふてる形たとへ石女ふて罪業深ふ

諸善薩の功徳何ぞ小踈ふ観世音勝れり一りんと共小常ふ

されば爰に一つの伝説儲まりて其ころ普門品を晝夜讀誦する事年あり
或夜の更ぬ小鳩八旬小丈の人老僧香染の袈裟小水晶の珠数を持ち杖
右の手小鳩の杖左の手小二巻の経を持ち経巻の往来小立せり此経巻
二十五章の門品なれば誰しもよく知る普陀落山の教主なり此経巻を
てむきく小老の夫婦此霊告を蒙り感涙して歓ひ迎へ祈る事年と
成て月を累て一男を伝儲く夫婦の寵愛限り無し出誕の後二月ばかり小
赤き伝乳母小恙を母ハ園小出て桑伝摘れる其時雲中より金色の薩埵
然として翔来り赤き伝抱て虚空小飛び鳴唯哉といで早雲小乗じ夜
夫婦の歎大小作ぎ地小倒れ悲歎慈傷断ばかり云ふ小一つの伝妻る
より家屋財寶益ず捨て共小何国へも行く事なり我も小再ひ
逢んそと冰山の巌伝登り一本實伝粮と又草根の凛々る
かゝるほど小卧て浪の吉小夜伝明し一年月を累て我共老ぬとの介
ゑる只風狂のごくまかり示呻吟の伝奥の大悪川小ゐりてかく詠ん

みちのおく阿川と聞けれど形もなし流れの清き
せんとう東山道小かゝり信濃国より住則ち相州由井里を帰るいそく
住し家も今は其形もなく壁落軒端崩れ門も朽く扉も脱くる小涙
もとゞめ又故伝汝おて都の方へとまり伝ざし海を渡れ統ぎ果まて
ゝゝんと体小顧頼と喪て見伝小なりも形く流落の姿と成ぬるこそ
表の鶴叢の雉子も猿の声よも猿の断腸の思ひ耐ぬる共小血涙ぞめる一日
の程之しく半日の齢のうち老躰の千里と思くどて疲れ飢鷹の一咬伝
三十の年ぞ長ひろる命を考ふれば其頃南都小義浄僧正とて碩学宏徳の名僧ありける和の事
形る小当来導師弥勒菩薩来臨の体と夢見る人其早且小春日野小到り
大明神小詣其ゆくさ形る楠の枝の間小赤き伝聲聞も怪しくまもり
見る小金色の鸚鵡嬰児と恠て巣中小あり斯て僧正持尊の不動る手
初つゝ人て一正の猿来てうの嬰児伝恠正小ある即家小入り撫育

ゐ人聽る名とは金鷲童子ぞ我ゝ歸る事久て年月を暦ほど小十九年ゐ
そ歩うあひ々る聰明清徹の神童ゐして依ゐ彼ゝ者ゐ一放うた師の僧正い
年齢八十ゐして入寂ーの人金鷲奇童ゐ依ゐ哭ー其時巡禮のあゐを
たう執金剛神の像ゐ作ゐ彼うを御正ゐ奉ゐ作ゐて引動ゐめーて禮拜
毎ゐ唱て云聖朝安穏天下泰平無窪佛法利益衆生ーぞ祈ゐる信力
通ーて忽御正ゐう五色の光明ゐ放て官中ゐ照ーる 聖武天皇あれゐ
ゑ入る勅使ゐ召て曰いゐるや光明王宮ゐ照ゐ金鷲音て佛法興隆の志
頭あう勅使ゐ奏ゐ達のれい 帝ゐ収ゐ金鷲行者ゐ召れ膝ゐ俗
恭信の志ひとゐ感ーまゐ其師ゐ求ゐ行者ゐ是うう我戒師と為ゐ干と宣
旨あうれい金鷲纏る薙髪ーて良辨ゐ申る甚うう 帝の御歸依深
かばーて遂ゐ春日野ゐ東大寺ゐ建れ大佛殿と称ゐる即良辨
別當職ゐ蒙るのい是華嚴宗の監觴ぞ往ゐ時忠夫婦いゐ海辺ゐ

少ーて山城國淀の大渡ゐ着て陸ーゐ上ゐ頼ゐ便船ゐ乞れい即船とあーま
らゐ國ゐうゐ里の人も乗合ゐれ彼ゐ里ゐ人ゐ聖武帝の御戒師東大寺の別當僧正良辨と申くまき幼き時鷲の巣
より取ーなる人とぞ承る今い帝の御恩依厚く世の聞ゑも例ぞく聡く侍る
らぞ諸ゐ時忠夫婦れを聞うも胎驚記急き船より下りて奈良の
都と急ゐ其地の寺社ぞ巡礼ー偏ゐ我ゐ小遂せゐくと祈念ゐ彼ゐ二人ゐ
おゐも其ゐ情ゐれうれば身疲れく東大寺の南大門の傍ゐ三年の件と
ゐ安東蔭ゐ纏て悩煩ひゐる其頃僧正良辨奈内のゐるゐ老夫婦の方ゐう
先出て良辨の車ゐ駈ーそう僧正性ゐ向せゐば我ぞ相模國の者ゐーゐ
鷲小孤れ餘ゐ井ゐこのまゐ三十餘年其ゐ情ゐを忘ゐ給ひいこ車ゐ
其誕生の年月いこ夫婦答て其要見の守袋ゐも記せるゐく慶雲二年
己巳四月十五日ゐ僧正ゐれ彼聞て取ぞ我父母ゐーん且い歓び且ゐ歎ゐ又
共ゐ小御車ゐ乗て御館舎ゐ伴ひゐ其ゐ貴賤ゐれ彼傳聞て油ゐ絞ゐ

をおろそ帝あれ汝聞召感涙と催し則詔有て幸領安堵の官符被賜されば相州由井里小むら小袋谷に造つて遠辺の親族聚りてむりの春小過おちていせ賜へふる良弁僧正も故郷忘れ給ふ相州小社さゆひ由井より西の方小當て高山あり其山嶺より靈光赫々たり即僧正山へ玉民と聚てた汝伐り岩汝穿て高峯小至り光の元小至りて金色の石像の不動尊出現汝僧正おれ汝祈念し石尊と作し社と建て安置し又槻木汝をりく一躰の尊容汝像今の本堂奥不動明王おはしく山峯高くして清泉盼々として落小ふり一流の瓶泉溜々として巌頭より一流の瓶泉溜々として落小ふり今の二重の龍おれ心即青龍権現と祀て祠と傍小建ゆへ當山開闢の霊應汝帝小奏しゆへ敵感斜汝依て總房相二國の中小て寺領若干寄附ありて其倫旨汝賜へ其より伽藍壮麗小して平九院の坊舎小香煙の匂ひ芬々として盛衰天下の祈禱として僧正明王の尊前小三七日六波羅密汝修しゆへ滿願の日明王一偈汝示して曰

當来導師慈氏尊　我山建立作佛事　此地清浄為結界　東南西限十八町　是山五佛表形像　一度衆詣得壽福　法華尓生名良辨　未法衆生施安樂　迷多衆生不来住　我形像作為本尊　大明王當守護　家内安穏無諸病

當山金堂の乾の谷小大蛇あり汝住て良辨一七日加持しゆへ汝中より大蛇現して礼拝汝守護者と年久く荒神と成て五國の塵小交り法性の暁汝見ゑゆへ蛇身と転る今僧正の法施小よりて都率内院小生る汝後當山小跡汝垂て永守護神と成て法と魔障をる者汝歩ゆへ云絶て見へ大意以上當山寺記の抑此山と相州大山の高嶺小して名小而氣絶汝故小両降と山蹶とせり山蕨より頂嶺まで嶮々として歩行く當ゆへ双く倒さま左右小民家相連り其中小當山の御師の家多く諸國小檀那と持て来々神札と配らゆへ依て験者のよ聞ゆ奥の石尊神と汝往崔嵬として雲小連り霞小封汝毎歳六月廿七日より七月十七日